(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第17集

県道今井前橋線特殊改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

荒砥上諏訪遺跡 II

1982

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

荒砥上諏訪遺跡Ⅱ　　お詫びと訂正

本文31頁　第26図　土層断面図
以下のキャプションが欠落しています

上段　　１号住居
中段　　２号住居
下段　３・４号住居

ふりがな	あらと　かみすわ　いせき　2
書名	荒砥上諏訪遺跡　Ⅱ
副書名	県道今井前橋線特殊改良工事に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　調査報告
シリーズ番号	第17集
編著者名	能登　健　　飯田陽一
編集機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	379－8555　群馬県勢多郡北橋村下箱田784－2
発行年月日	1982年3月25日

収録遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あらとかみすわ	まえばしし　おおむろまち	市町村	遺跡	36° 22′50″		1979年		県道今井前橋線特殊
荒砥上諏訪遺跡Ⅱ	前橋市大室町2773番地 他	10201			139° 10′40″	2/1～3/31	1050㎡	改良工事に係わる調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	縄文時代前期	竪穴住居1軒	縄文土器・石器	1977年群馬県教育委員会が調査した荒砥上諏訪
	古墳時代後期	竪穴住居3軒	土師器・須恵器	遺跡の西側に隣接する同一の遺跡。

県道今井前橋線特殊改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

荒砥上諏訪遺跡 II

1982

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

雄大な裾野の赤城山南麓にある前橋市荒砥地区は、県内でも有数の古墳密集地帯であり、遺跡の宝庫と呼ばれています。

今井前橋線は、荒砥地区を東西に走る県道です。この県道改良工事に伴い昭和51年から始まった荒砥上諏訪遺跡、荒砥五反田遺跡の埋蔵文化財発掘調査は、この地に埋もれる先人の足跡を明らかにしてまいりました。そして、本冊子「荒砥上諏訪遺跡II」の刊行をもって、今井前橋線関連の調査が完結いたします。

発掘調査から報告書刊行までご指導・ご協力いただいた群馬県土木部・群馬県教育委員会をはじめとする関係各位、地元の方々に改めてお礼を申し上げます。

この小冊子が地域の歴史を解明する一助となるよう活用されることを念じ序といたします。

昭和57年3月25日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　清　水　一　郎

例　　言

1　本書は、昭和53年度　県道今井前橋線特殊改良工事に伴う荒砥上諏訪遺跡の第２次埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡はＡ地点が群馬県前橋市大室町2773番地ほか、Ｂ地点が同2761番地 ほかに所在する。

3　発掘調査は群馬県土木部、群馬県教育委員会の委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　発掘調査は昭和54年２月１日から昭和54年３月31日までの期間で実施した。

5　調査面積は1050㎡である。

6　発掘調査は　能登　健・飯田陽一が担当した。発掘作業に携わったのは次のとおりである。

石川忠三　井上正治　井上千代二　内田きく子　内田とし子　内田三重子　太田英明
岡野幾代　岡野きよ子　岡野 毅　奥野麻雄　奥野計恵　加藤ふく　神沢せつ子　神沢利子
神沢直人　神島きみ　木村かくの　久保千代子　栗原計子　栗原吉美　小林梅子　小保方静子
千吉良美代子　富岡和子　富岡しげ　富田益江　中沢芳次　中村栄子　根岸うめ　根岸 計
浜岡きく　浜岡やす　福島きみ　牧野せつよ　松村いわ　松村惣吉　山田きみ　山田　茂
山田フジ子　吉田英子

7　整理作業は昭和56年４月から９月まで、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で実施した。

8　整理作業は飯田が担当し、本書作成には次のものがあたった。

［実測・図版作成］　井野みゆき　高橋フジ子　田村栄子　皆川正枝　細井敏子　山田きよえ
［遺物写真撮影］　佐藤元彦
［執筆］　第２章の４を能登が、他は飯田が分担した。

9　遺構図面・写真および出土遺物・写真・図面等は、一括して群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。

謝　　辞

発掘調査にあたっては、群馬県土木部、前橋土木事務所に様々なご協力をいただいた。

整理作業にあたっては、新井房夫氏・内田憲治氏・小島純一氏からご指導・ご助言をいただいた。記して謝意を表します。

凡　　例

1　発掘調査には道路工事用幅杭を使って３m×３mのグリッドを設けた。グリッドの示す方向は磁北より東に10.1°傾いている。

2　遺構平面図は調査現場で１／20の平板測量で作成した。

3　出土遺物は調査現場の事務所で水洗・注記までを行い、整理作業の中で復元・実測・写真撮影を行った。

4　挿図中の方位は磁北をあらわす。

5　主軸方向は、竈の設けられた辺と垂直となる軸線を想定し、磁北からの角度を計測した。

6　本文中の住居平面図・断面図は１／60に、遺物出土状態模式図は１／100、竈図は１／30に統一した。

7　住居の床面積は、１／20原図上で壁直下もしくは壁溝上端までをプラニメーターにより３回計測し平均値を出した。

8　本文中の遺物図の縮小は、古墳時代の土器は１／４、縄文土器１／５、縄文土器破片１／３（ただし第20図のみ１／２）、石器は１／４とした。

9　遺物観察表には次のような略記号を使用した。

計測値　口→口縁上端部外径　頸→頸部外径　胴→胴部最大外径　底→底部外径

台→台部または脚部下端外径　高→器高　重→重量

（ ）→復元値　［ ］→残存値

計測値の単位はcm、重量はｇである。

備考　①→胎土　②→焼成　③→色調　④→その他

10　遺物写真図版の縮小率は本文中の挿図とおおよそ同一となるようにした。

11　本文中で引用した地図類の出典は以下のとおりである。

第１図　国土地理院　「前橋」　１／50000

第２図　前橋市土地計画図　１／5000を修正

第３図　前橋土木事務所　今井前橋線丈量図　１／300を修正

目　　次

序
例言・謝辞
凡例

第1章　発掘調査と遺跡の概要

1　発掘調査に至る経緯……1
2　遺跡の位置と地形……2
3　調査の方法……4

第2章　調査の内容

1　遺構の概要……5
2　古墳時代の遺構と遺物
　1号住居……6
　2号住居……11
　3号住居……14
3　遺物観察表……16
4　縄文時代の遺構と遺物
　(1)　4号住居……18
　(2)　4号住居出土遺物……22
　(3)　包含層出土遺物……23
　(4)　ま と め……29
　(5)　石　　器……29

第3章　成果と問題点

1　古墳時代の住居を覆う軽石について……31
2　古墳時代の集落について……32

挿図目次

第１図　遺跡位置図……1
第２図　遺跡調査範囲図（１）……3
第３図　遺跡調査範囲図（２）……4
第４図　遺構配置図……5
第５図　１号住居……6
第６図　１号住居竈断面および遺物出土状態……7
第７図　１号住居出土遺物（１）……8
第８図　１号住居出土遺物（２）……9
第９図　１号住居出土遺物（３）……10
第10図　２号住居……11
第11図　２号住居竈断面および遺物出土状態……12
第12図　２号住居出土遺物……13
第13図　３号住居……14
第14図　３号住居竈断面および出土遺物……15
第15図　４号住居……18
第16図　４号住居遺物出土状態……19
第17図　４号住居出土遺物（１）……20
第18図　４号住居出土遺物（２）……21
第19図　４号住居出土遺物（３）……22
第20図　包含層出土遺物（縄文土器１）……24
第21図　包含層出土遺物（縄文土器２）……25
第22図　包含層出土遺物（縄文土器３）……26
第23図　包含層出土遺物（縄文土器４）……27
第24図　包含層出土遺物（縄文土器５）……28
第25図　包含層出土遺物（石器）……30
第26図　竪穴住居埋没土の観察……31

写真図版目次

PL－1	上	遺跡（A地点）遠景（西側低地部分から望む）
	下	竪穴住居全景（西から）
PL－2	上	1号住居　全景（西から）
	左中	1号住居　竈断面（南から）
	右下	1号住居　竈袖石確認状態
PL－3	上	1号住居　竈と周辺遺物出土状態（西から）
	左中	1号住居　南側貯蔵穴と出土遺物
	左下	1号住居　北側貯蔵穴と上面出土遺物
	右下	1号住居　竈と周辺遺物出土状態（北から）
PL－4	上	2号住居　全景（西から）
	右中	2号住居　竈断面（北から）
	左下	2号住居　竈と周辺遺物出土状態（西から）
PL－5	上	3号住居　全景（西から）
	右中	3号住居　埋没経過の確認（南から）
	左下	3号住居　竈断面（南から）
PL－6		1号住居　出土遺物（1）
PL－7		1号住居出土遺物（2）および2号住居出土遺物
PL－8	上	4号住居　全景（南から）
	下	4号住居　遺物出土状態（東から）
PL－9	上	4号住居　出土遺物（1）1～4
	下	4号住居　出土遺物（2）5・28～30
PL－10	上	4号住居　出土遺物（3）6～12・14・15
	下	4号住居　出土遺物（4）13・16～27
PL－11	上	包含層出土遺物（1）1～16
	左下	包含層出土遺物（2）17表
	右下	包含層出土遺物（3）17裏
PL－12	上	包含層出土遺物（4）19～28・31・32
	下	包含層出土遺物（5）39～52
PL－13	上	包含層出土遺物（6）29・30・33～38表
	下	包含層出土遺物（7）29・30・33～38裏
PL－14	上	包含層出土遺物（8）63～76表
	下	包含層出土遺物（9）63～76裏
PL－15	上	包含層出土遺物(10)53～61
	左下	包含層出土遺物(11)77～82表
	右下	包含層出土遺物(12)77～82裏
PL－16	上	1号住居　土層断面
	中	2号住居　土層断面
	下	3・4号住居　土層断面

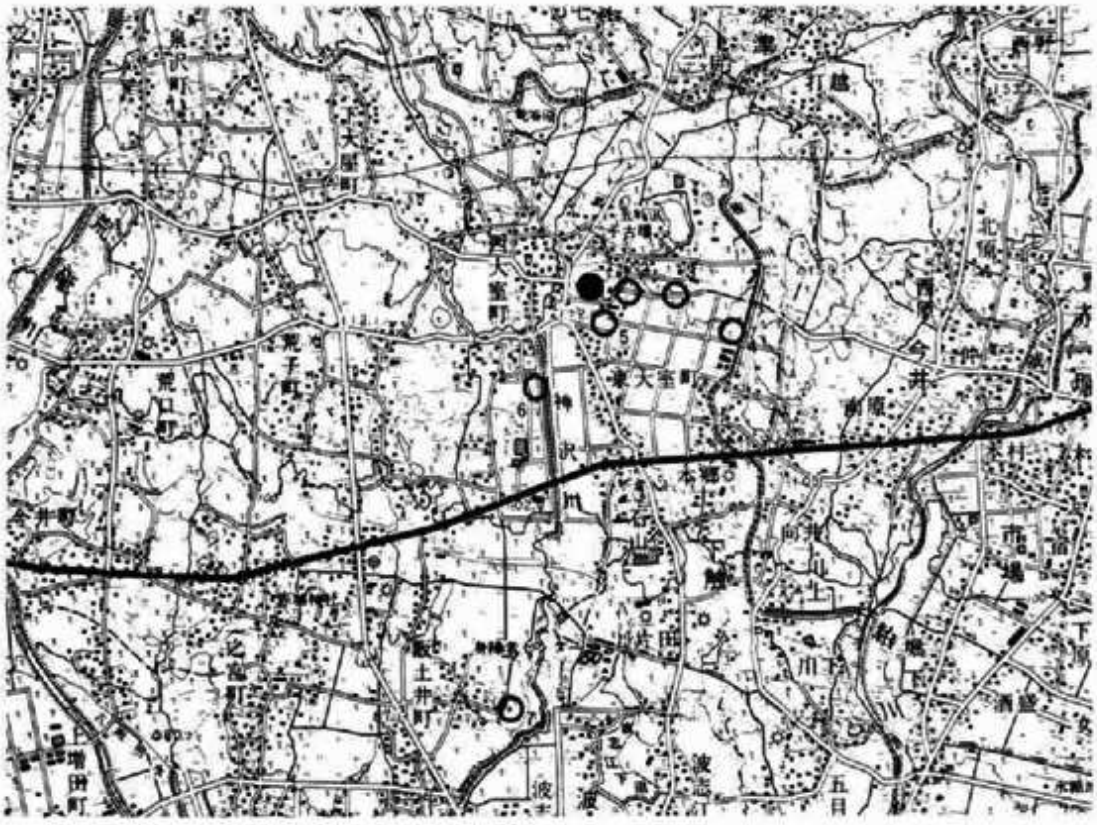
第１章　発掘調査と遺跡の概要

1　発掘調査に至る経緯

県道今井前橋線は、東毛地域と群馬県中央部を結ぶ幹線道路国道50号線から、佐波郡赤堀村今井で分岐し、前橋市北部の上細井町で県道前橋赤城線に交わる延長約12kmの道路である。

昭和49年度に、県道深津伊勢崎線以東の前橋土木事務所管内の前橋市西大室・東大室地内の約1500m区間で、拡幅や路線付替えによって、側溝付きの11m幅道路とする「一般県道今井前橋線道路特殊改良第一種工事」が計画された。周辺は以前より遺物散布地として周知され、学校建設に伴って遺物が出土したことのある地域であった。同年６月に群馬県土木部と県教育委員会文化財保護課との協議で、工事着工前の埋蔵文化財調査が実施されることとなった。

これを受けて昭和52年２月から３月に西大室町上諏訪地内の荒砥上諏訪遺跡Ｃ・Ｄ地点で古墳時代の集落と古墳周堀が調査された（第１図-２）。続く昭和52年７月から９月には西大室町五反田地内の荒砥五反田遺跡で古墳時代前期から平安時代にかけての集落が調査された（第１図-３）。これらの成果が群馬県教育委員会より「荒砥上諏訪遺跡」ならびに「荒砥五反田遺跡」として刊行されている。



第１図　遺跡位置図　　（国土地理院「前橋」１：50000）

昭和53年度、急増する群馬県内の埋蔵文化財発掘調査に対応するため、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が設立された。これに伴い、県道今井前橋線の第３年次調査は群馬県教育委員会文化財保護課から当事業団に引き継がれた。荒砥上諏訪遺跡Ｃ地点の西側に隣接する路線付け替え部分のＡ・Ｂ地点（第１図-１）が荒砥上諏訪遺跡の第２次調査として実施されることとなった。県道深津伊勢崎線を起点として120mから320mの区間にあたる。発掘調査期間は昭和54年２月から３月まで、実質調査面積は1,050㎡である。

２　遺跡の位置と地形

「荒砥」の地名は、明治22年の町制施行により近隣の町村を合併して成立した荒砥村に由来する。同村は昭和30年にも合併を行い城南村と改名し、昭和42年には前橋市と合併した。

昭和49年から着工された前橋荒砥南部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査でこの地域の遺跡名に荒砥の名が冠されたため、今井前橋線の遺跡にも大字名としては存在しない荒砥の名がつけられている。

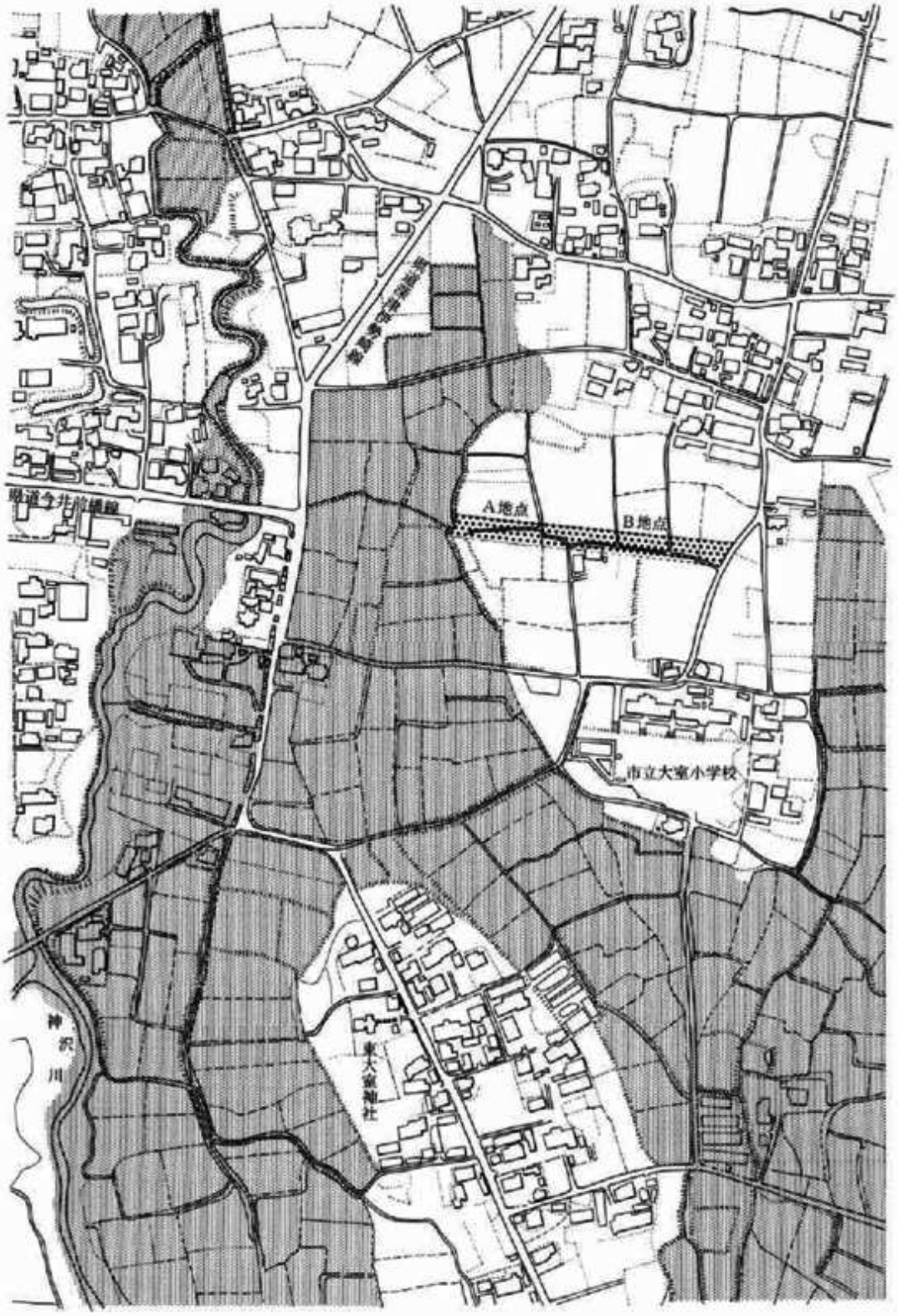
荒砥上諏訪遺跡は、前橋市街地の東方約８㎞に位置する。ここは赤城山南麓の広大な裾野の末端近くにあたる。付近は赤城山の山麓中腹より流出する小河川の浸食・氾濫によって作られた、樹枝状の開析谷と沖積地、および舌状にのびる台地からなる複雑な地形となっている。

本遺跡は南北に舌状に残る低台地上に立地している。Ａ地点は西側に緩やかに傾斜する位置に、Ｂ地点は台地ほぼ中央の平坦な位置にある。神沢川左岸の低地帯を望む標高120m前後の位置にあたる。周辺の水田からの比高差は竪穴住居のある台地縁辺で２～３ｍ、台地中央で５ｍ前後である。調査地の地目は桑園および畑地であった。

遺跡周辺は群馬県内でも有数な古墳密集地であり、荒砥上諏訪遺跡Ｃ地点でも小円墳の周堀を調査している。とりわけ本遺跡の北北東方向には６世紀代に継続的に構築された100mクラスの３基の前方後円墳が並ぶ、荒砥三・二子古墳がある。これは地域の盟主的な古墳群と考えられている。３基の前方後円墳の内、最も南側に位置する前二子古墳までは、本遺跡から600mほどの距離である。

本遺跡の周辺には古墳時代から平安時代までの集落が広がっている。荒砥上諏訪遺跡Ｃ地点では古墳時代の住居、荒砥五反田遺跡で古墳時代前期から平安時代までの集落が調査されたほか、桂川右岸の荒砥上川久保遺跡（第１図-４）、神沢川右岸にある荒砥東原遺跡（第１図-６）・荒砥二之堰遺跡（第１図-７）などで古代の大集落が次々に調査されている。

今後、荒砥地区圃場整備事業や上武道路建設に伴う大規模な発掘調査がさらに予定されている地域であり、全国的にも密度の濃い遺跡群の調査が期待されている地域である。



第2図　遺跡調査範囲図(1)　(1：5000)

3　調査の方法

発掘調査は東側のＢ地点から着手した。第２図の地番では2747・2761にあたる。この地点の東側に隣接するＣ地点（地番2745他）は東に向かって緩やかに下がる傾斜面となる。昭和51年度の調査では古墳時代後期の竪穴住居２軒や古墳周堀が調査されている。

Ｂ地点は台地中央にあたり平坦で、採取される遺物の少ない地点である。ここは北側に隣接して小円墳状の土山があり、古墳周溝が調査範囲にかかる可能性を考慮して、トレンチ調査とした。桑畑のサクに沿って東西方向のトレンチを設定し、人力によってローム上面まで掘り下げた。出土遺物は畑の地番毎に取り上げた。縄文時代の遺物や埴輪円筒片の出土があった地点を中心に桑の抜根を行い、トレンチを広げたが、遺構は確認できなかった。

調査範囲の西側にあたるＡ地点は西側に向かって下がる傾斜面である。土師器や縄文土器片が多数表面採取され、竪穴住居の存在が想定された地点であった。地番では2773他にあたる。重機により桑の抜根を行った後、調査地区を計画路線幅杭に沿って３ｍ×３ｍのグリッドを設定した。路線幅杭は県道深津伊勢崎線を起点とし、東へ向かって20ｍ毎に番号が付けられたものである。グリッドの軸方向は磁北より東へ10.1度傾いている。グリッド内を人力でローム上面まで掘り下げながら遺構確認を行ったが、特に包含層遺物の取り上げに注意した。遺構の確認できたグリッドはベルトを外して全容を把握できるようにした。

遺構測量は平面図・遺物取り上げ図を平板測量により１／20で作成し、断面図は住居を１／20、竈を１／10の縮小図とした。遺構撮影にはモノクロ写真に６×９中版カメラと35ミリカメラを、カラーリバーサル写真には35ミリカメラを使用した。

第３図　遺跡調査範囲図（２）　（１：2000）

第２章　調査の内容

1　遺構の概要

調査地域の西側にあたるＡ区は、西側に向かって低くなる緩傾斜地である。ローム層を基盤としていて古墳時代の遺構は比較的明瞭であった。グリッド調査で古墳時代後期の竪穴住居３軒を確認し、東側より１から３までの住居番号を付けた。

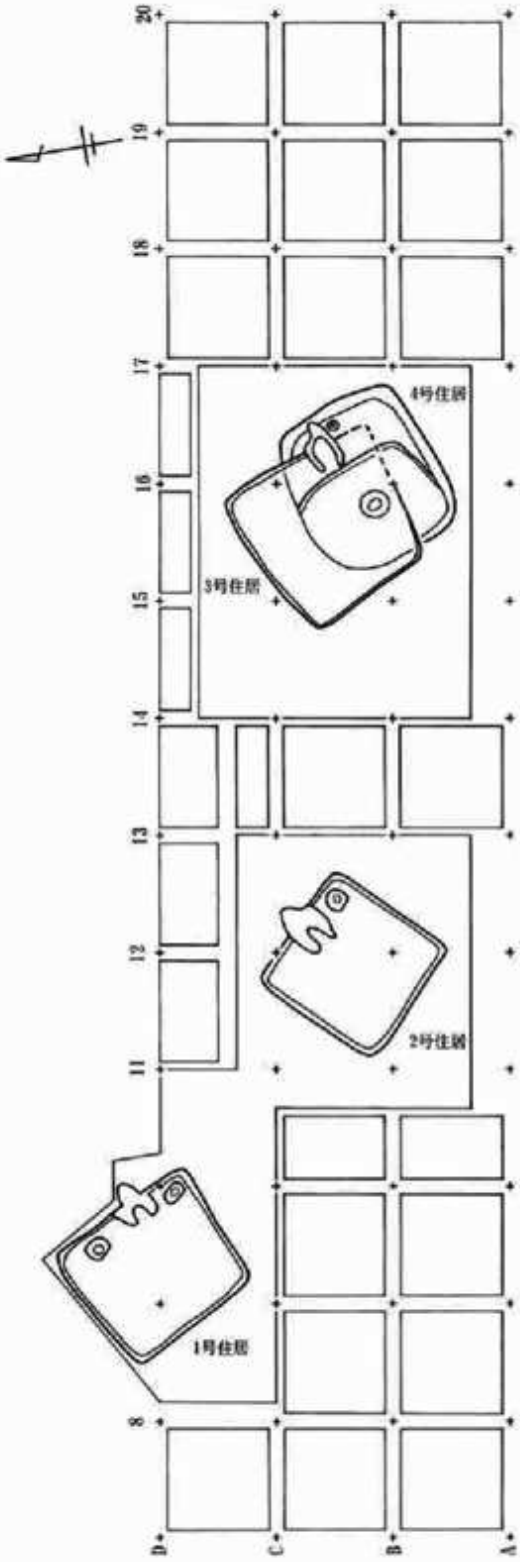
確認した住居を中心にグリッド掘り広げたのち、表土からのセクションベルトを残しながら埋没土を掘り下げていった。この３軒は規模や軸方向など類似点が多く、遺物から推定される年代も近似していた。Ａ区は短期間に営まれた比較的小規模な集落の一画と想定される。

なお、縄文時代の竪穴住居１軒は、この面での遺構確認段階では把握できず、古墳時代の竪穴住居掘り下げ中に別住居であることを確認し、４号住居とした。

遺構の残存状態は全体的に良好であった。また、グリッド内からは多量の縄文時代遺物が出土している。反面、グリッド内の古墳時代遺物の出土は少なく、竪穴住居の依存状態の良さが窺える。

Ｂ区は古代の遺構は確認できなかったが、トレンチ内から縄文時代の遺物や埴輪円筒片が採取されている。埴輪円筒片はＣ地点の調査で周溝が確認された2743-１番地に所在する荒砥村54号墳に伴うものと思われる。

なお、中世・近世の遺物は両地点とも出土しなかった。



第４図　遺構配置図　（１：200）

2　古墳時代の遺構と遺物

1号住居

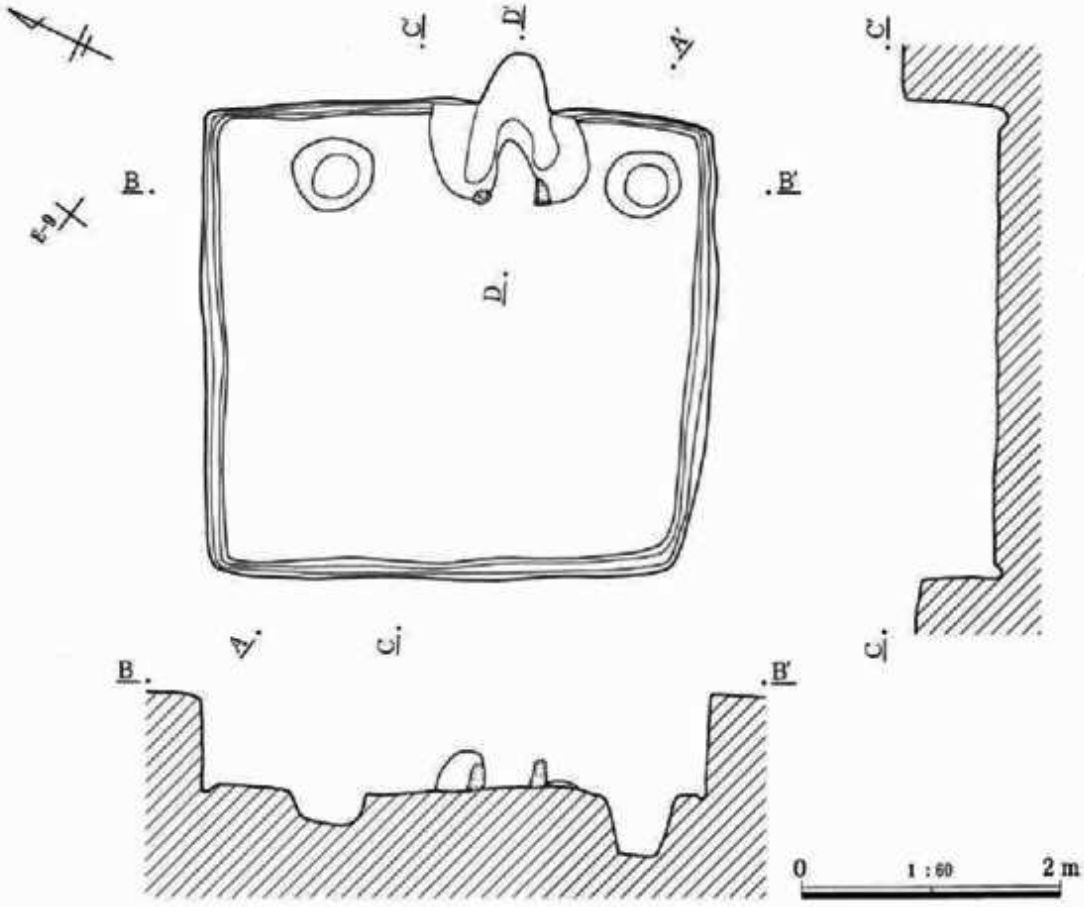
位置　D－9グリッドにあり、調査範囲内では最も西側に位置する遺構である。地山は西側に向かって緩やかに傾斜していて、住居西壁付近の確認面は東壁付近に比べて15cm低くなっている。

形状と規模　東辺が3.8m、西辺が3.5、南・北辺が3.4mで、東壁がわずかに開き気味であるが、正方形に近い形状である。特に北東・北西隅は直角に近い整った壁面である。

主軸方向　N－69°－E　　**面積**　11.85m²

竈　東壁の中央やや南よりにある。煙道は住居床面とほぼ同レベルで掘り込まれ、壁外へ40cm張出している。煙道部の立ち上がりは垂直に近く、埋め戻し土で傾斜をつけたものと思われる。袖部分や天井部分はローム土主体の構築材で造られている。焚き口部は礫組みで、割り石を使っている。燃焼部は壁より内側と想定され、袖石部分周辺の床面が特に被熱している。

壁　垂直に近い壁が残存していた。床面からの高さは竈周辺で70cm、南東隅付近で55cmある。**壁溝**　竈下を除いて壁直下を全周している。断面はU字状であまり明瞭な掘り込みではない。規模は一定せず、幅9～12cm、深さ3～6cm前後である。

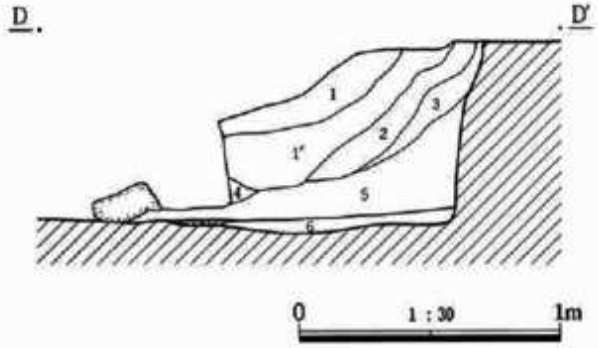


第5図　1号住居

貯蔵穴　竈の南北両脇から貯蔵穴を確認した。南側貯蔵穴は床面からの深さ45cm、北側は25cmで、底面は平坦である。南側貯蔵穴は遺物が流れ込むような状態で出土しており、住居使用時に開口していたことが想定できる。北側貯蔵穴の遺物は住居床面レベルでの出土であり、こちらの貯蔵穴は住居廃絶時には埋め戻されていたものと考えられる。柱穴は確認できない。

床面　ローム掘り込み面をそのまま床面としている。凹凸の少ない良好な床が残存している。地山の傾斜に幻惑されず、ほぼ水平な床となっているが、南東隅貯蔵穴付近はやや低くなっている。

焼失住居と思われ、柱材と思われる炭化材が床面から出土しているが、焼土・灰等はあまり明瞭には観察されない。床面の被熱による赤変や硬化部分も認められない。



竈断面

1　暗黄褐色土層　ローム土の混入の多い締まり強い層。竈天井部構築材が多く含まれた層と思われる。1'は褐色土の混入多い。

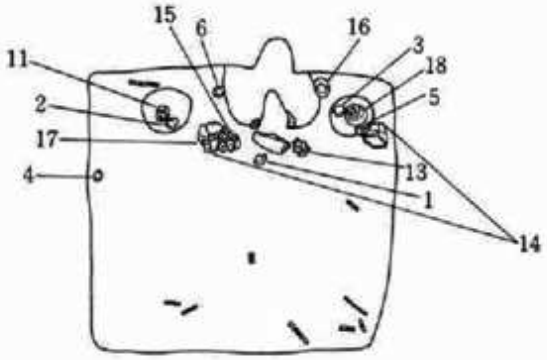
2　暗赤褐色土層　1cm大の焼土ブロックやロームブロックの混入のやや多い層。竈天井部の崩落土が混入した層と思われる。

3　黒褐色土層　やや腐植質の非粘性土。焼土粒を少量含む。煙道部からの流れ込み土と思われる。

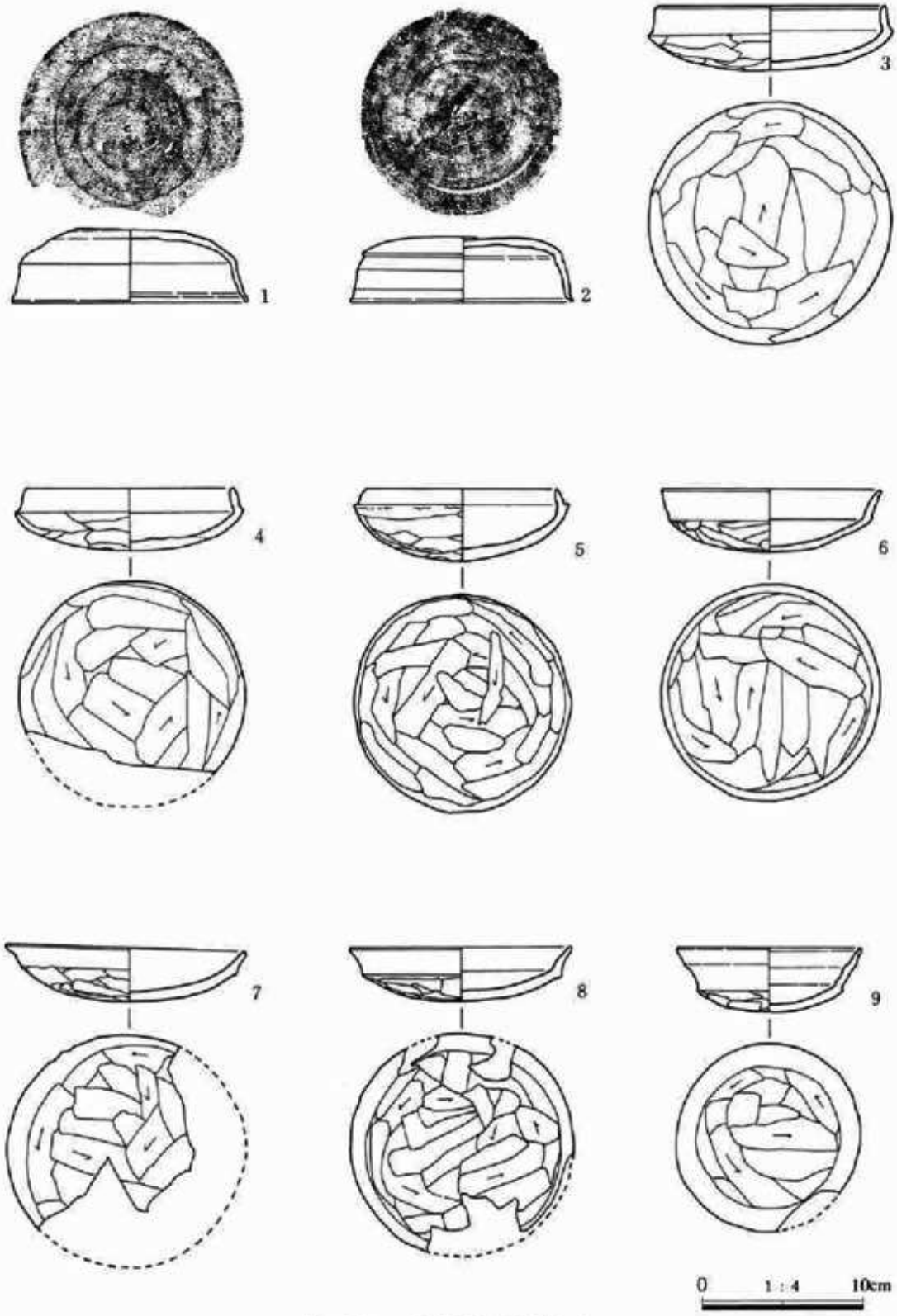
4　暗褐色土層　住居埋没土中に、ローム小ブロックが混じる。焼土の混入は少ない。竈掛け口・焚き口部から流れ込んだ住居埋没土。

5　暗赤褐色土層　3層土中に黒色灰ややや大粒の焼土ブロックの混入多い。

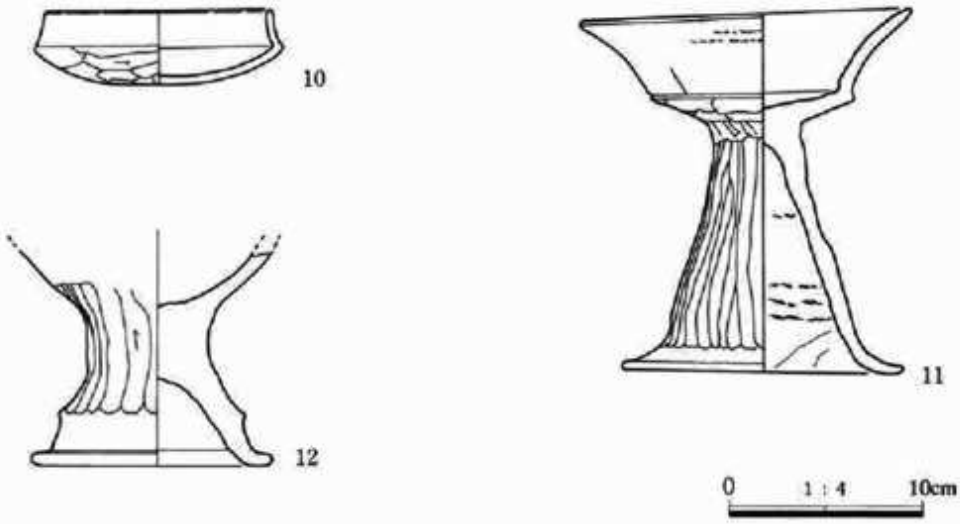
6　黒褐色土層　灰の混入の多い、ザラザラした土層。上面は被熱の痕跡があり、最初の火床面であったことがわかる。6'は特に赤変硬化が顕著。



第6図　1号住居竈断面および遺物出土状態



第7図　1号住居出土遺物(1)



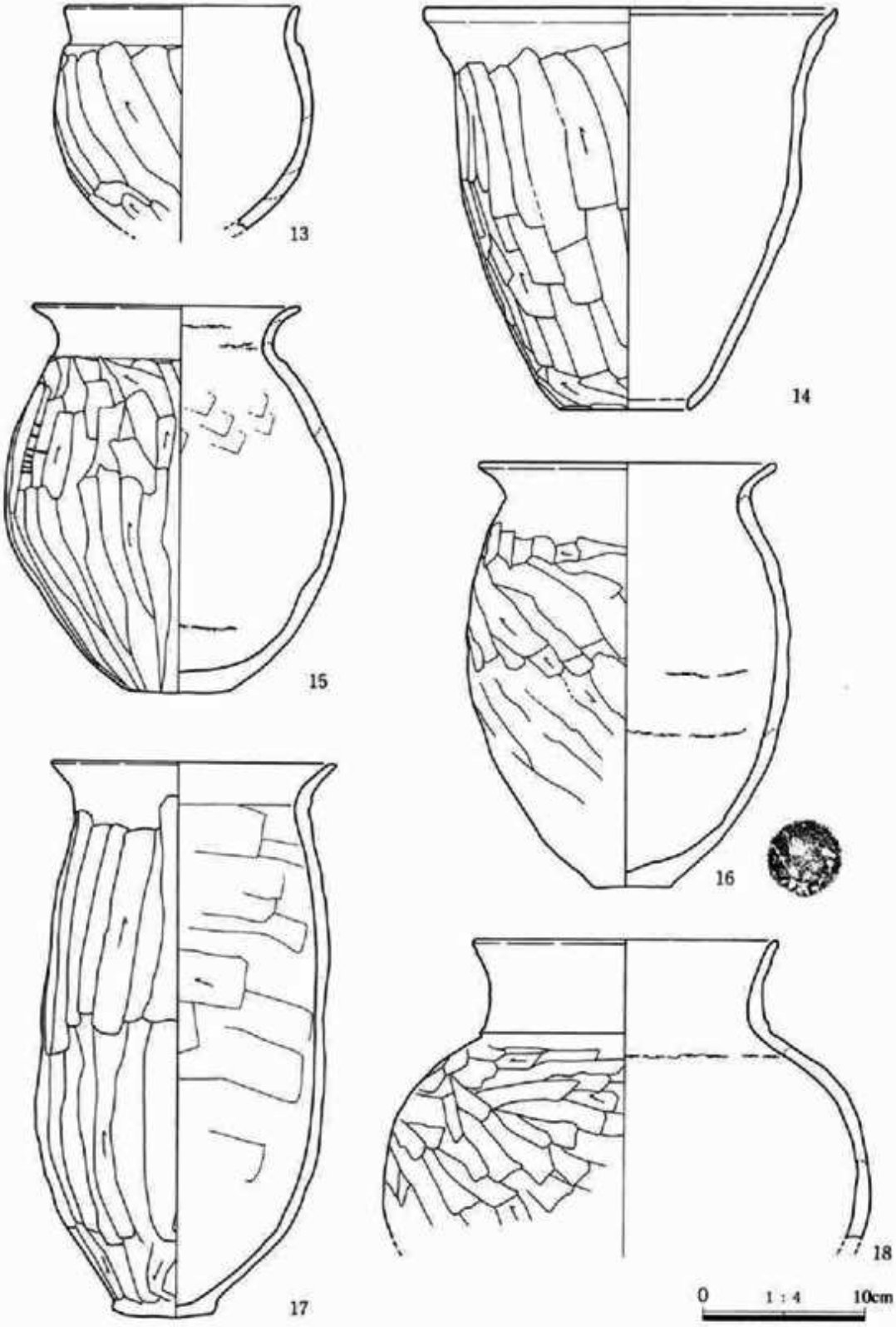
第８図　１号住居出土遺物（２）

遺物の出土状態　竈や貯蔵穴周辺を中心に、住居東半部分から多量の遺物を出土している。図示したのは杯10点、高杯１点、壺甕類６点、甑１点である。

１の須恵器杯は竈前の床面出土である。２の須恵器杯蓋・11の高杯は北側貯蔵穴上のほぼ床面レベル出土である。２は強い二次火熱を受け、脆弱化して土師器と同じ色調に変わっている。11の高杯は倒置されていた。３・５の完形の杯・18の壺は南側貯蔵穴内で住居床よりは低く、底面からは浮いた状態での出土である。４の杯は北壁直下の床面、６の完形の杯は竈北袖脇の床面出土である。13の小型甕は竈前の床面、16の甕は竈南袖脇の床面出土である。15・17の甕は竈北袖前の床面に潰れていたものである。14の甑は南側貯蔵穴脇の南壁直下床面出土である。７の杯は８片・８の杯は13片の埋没土土内や竈内の破片が接合したもので、どちらも破損後に火熱を受けている。12の台付甕台部は竈内や埋没土出土の４片が接合したもので強い二次火熱を受けている。竈支脚に転用されたものと思われる。その他の遺物はいずれも埋没土内の出土である。13は12と同一個体の可能性がある。

本住居の出土遺物は他の古墳時代住居２軒と比べ質・量ともに豊富である。特に完形土器が多く、また床面出土遺物が多い。

土器の出土状態や整理段階での観察から、煮沸土器類は二次的火熱を受けていて、竈で使用されていたものと想定される。併せて残存状態が良くてほぼ完形にまで復元できたにもかかわらず、支脚に転用されたと考えられる12以外は竈内から出土していない。竈に掛けずに住居内に放置した状態であった。また、杯類は散らばって出土しているが、完形に近い杯はいずれも正位（上を向いた状態）で確認されている。これらも使用直後に放置されたまま埋没したのであろうか。きわめて特徴的な出土状態である。



第9図　1号住居出土遺物(3)

2号住居

位置　B－12グリッド　1号住居の南東5mの位置にある。

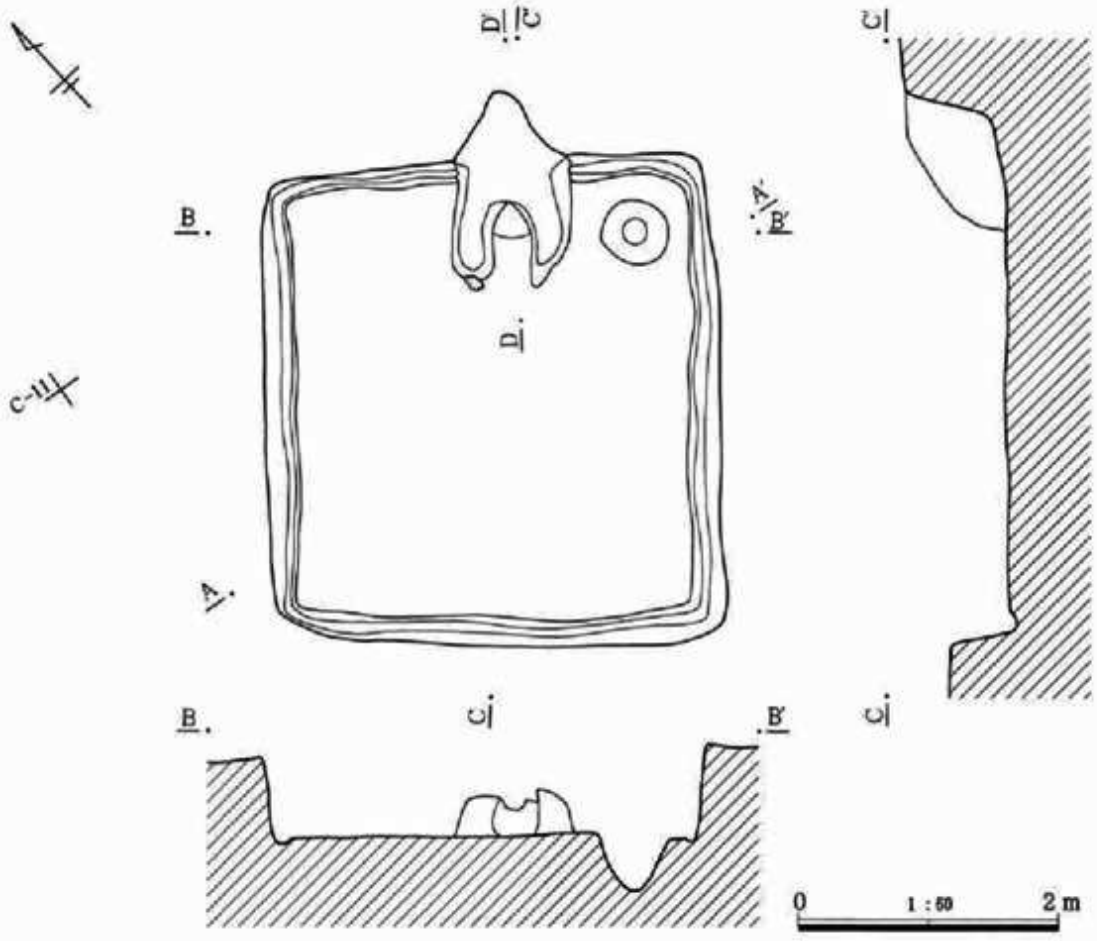
形状と規模　北西・北東辺が3.3m、南東・南西辺が3.5mで、ほぼ正方形の整ったプランを呈している。

主軸方向　N－47°－E　他の2軒の古墳時代住居と比べ、北側を向いている。　**面積**　9.78m²

竈　北東壁の中央やや南よりにある。煙道はほぼ床面レベルのまま掘り込まれ、壁外へ50cm張り出す。壁の立ち上がりは80°前後の急傾斜となっている。燃焼部は壁内側にある。袖部や天井部はローム土を主体とする構築材で造られているが、1号住居に比べて明瞭ではない。他の古墳時代住居焚き口部に見られる割石による芯材使用はない。

壁　上方に向かってやや開き気味になるがほぼ直線的な壁である。竈周辺や南東辺付近では70cm、最も低い南西辺では45cmの壁高がある。

壁溝　竈下を除いて全周している。幅は最大でも10cmほど、深さは3～5cmほどであまり明瞭ではなく、小さく蛇行する箇所もある。



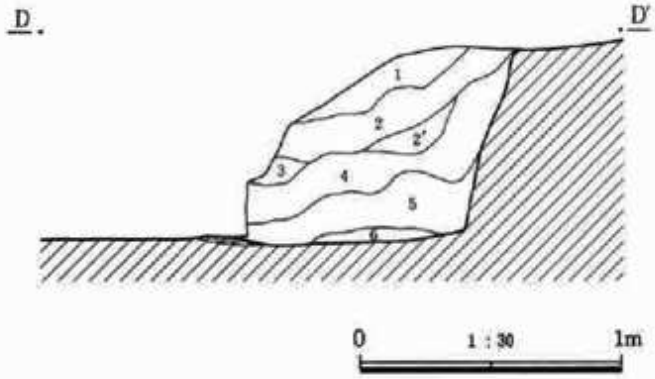
第10図　2号住居

貯蔵穴　東隅に深さ43cmの貯蔵穴がある。底面は丸底で先細りの形状である。埋没状態の記録を残さなかったが、住居廃絶時には開口していたものと思われる。柱穴は確認できなかった。

床面　ローム掘り込み面をそのまま床面としている。凹凸の少ない良好な床が残存している。地山の傾斜にそって、僅かに南側・西側が低くなっていて、南東隅貯蔵穴付近はやや低くなっている。焼失住居と思われ、床面のほぼ全域から多量の炭化材が床面から床上15cmまでの層内から出土している。また、西壁直下には焼土も多い。

遺物の出土状態　住居の全域に散らばるようにして煮沸具類を中心とした遺物が出土した。2の鉢、6・7の甕は竈袖に密着するようにして出土した。3の小型甕は竈前の床面から、5の甑は住居南隅の床面出土である。4の甑は竈前から南東壁下の床面に散乱していた遺物が接合したものである。1の須恵器小型壺は上面埋没土出土で本住居に確実に伴うか不明である。

本住居には1号住居に多数見られた杯類の出土がない。5の甑、7の壺のような完形品があるが、甕類が竈内から出土しないことは1号住居と同様である。



竈断面

1　暗褐色土層　軽石の混じる住居埋没土。

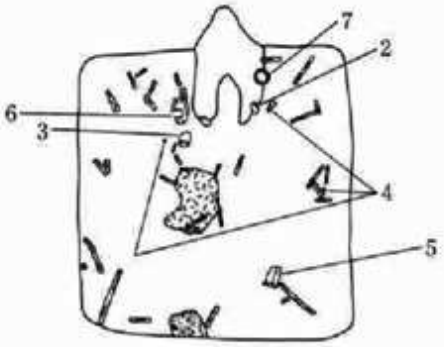
2　暗黄褐色土層　ローム粒の多い竈天井部構築材。下へ向かうほど焼土の混入多く、2'では焼土ブロック状になる。

3　暗褐色土層　やや粗粒の掛け口よりの流れ込み土。焼土を殆ど含まない。

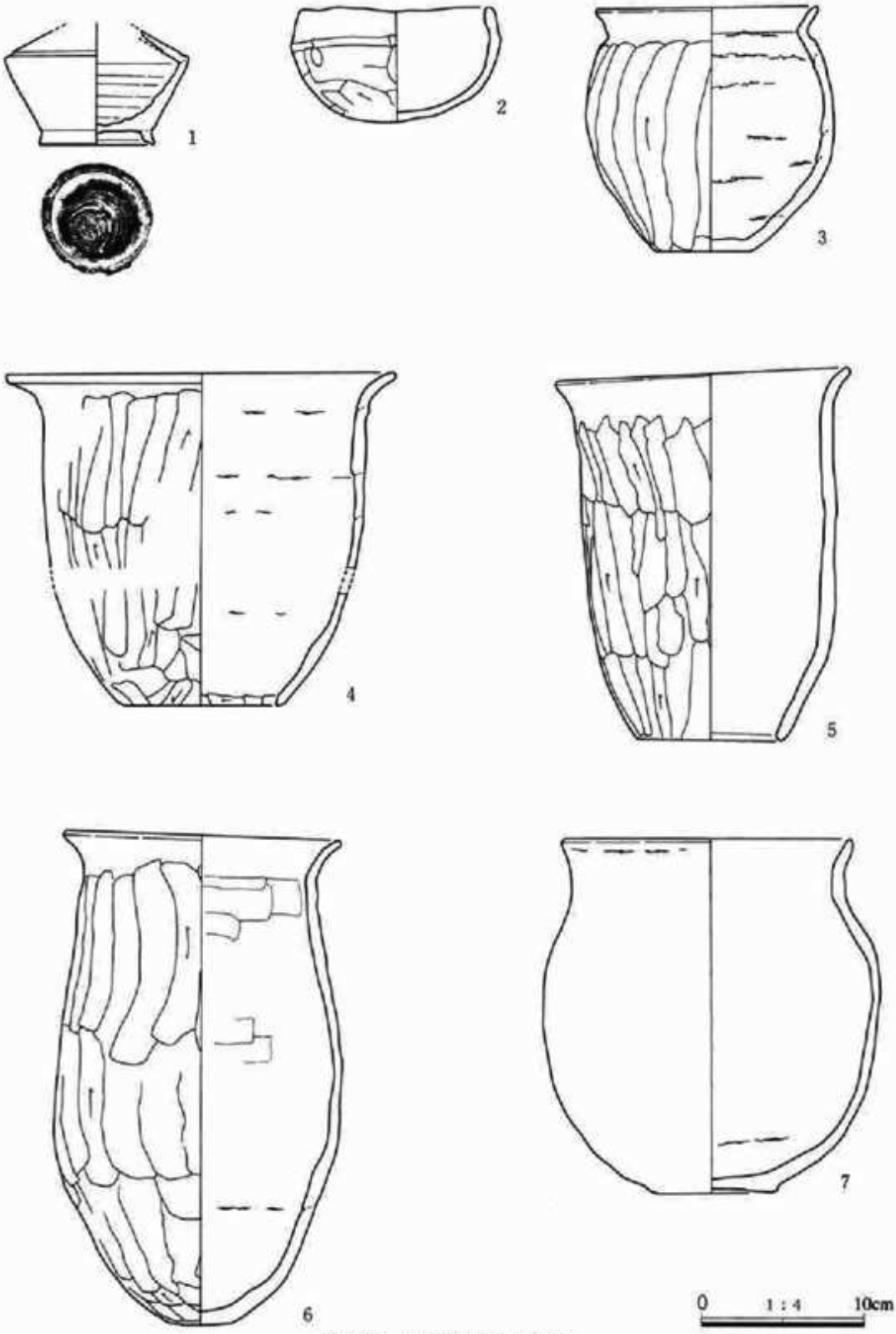
4　黒褐色土層　煙道部からの流れ込み土。焼土・灰・ローム土等を不均等に含む。しまり欠く。

5　赤褐色土層　焼土・灰を多量に含む層。崩落した天井部材や竈内燃焼物をあまり掻き出さずに放置したものか。

6　黒褐色土層　黒色灰の混じるしまり強い層。竈構築当初の床面か。



第11図　2号住居竈断面および遺物出土状態



第12図　2号住居出土遺物

3号住居

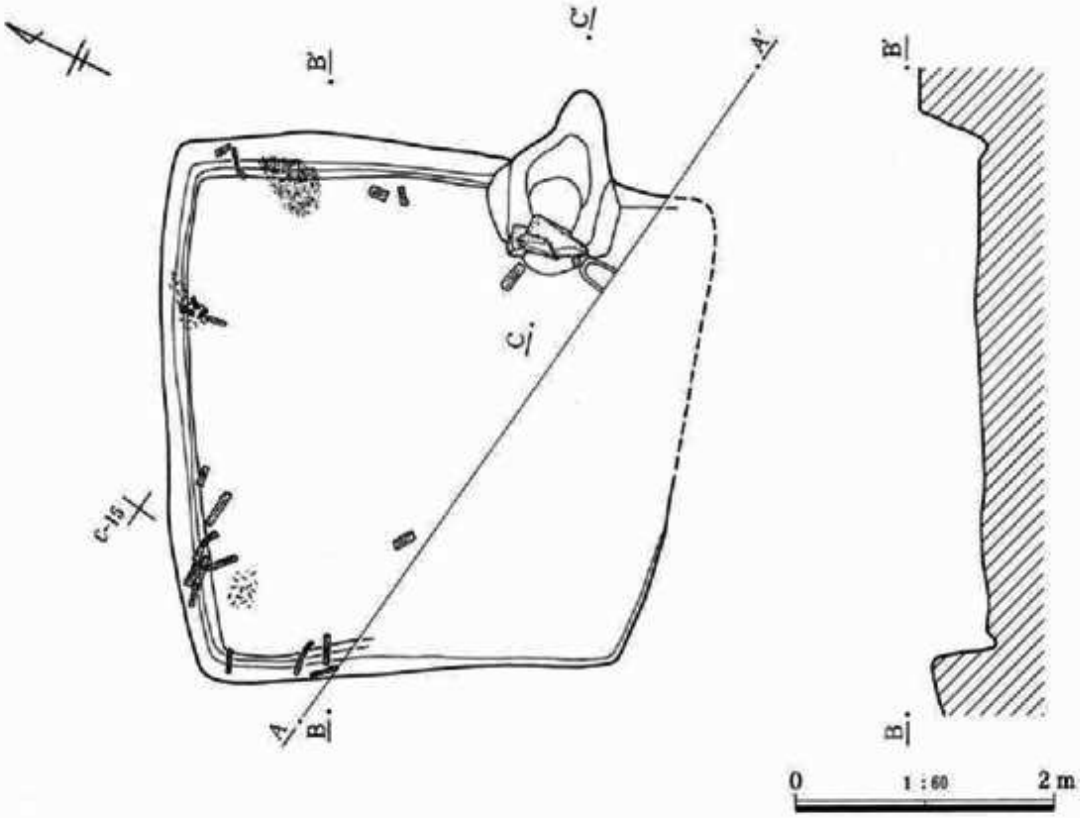
位置　B－16グリッド　2号住居の東方約6mの位置にある。重複する縄文時代の4号住居の確認を誤って同時に掘り下げてしまい、南隅と南東壁下の大半を失っている。

形状と規模　北隅と西隅は直角に近い。東隅と南東辺は遺構確認段階の想定プランによるところが多いが、壁の立ち上がりが確認できた南隅は鈍角に開いている。北東辺の広い台形気味のプランになると思われる。3軒の古墳時代住居の中では、著しく歪んだ形状となっている。規模は北辺で4.1m、西辺で3.2m、東辺は3.7m以上ある。

主軸方向　N－76°－E　1号住居と近い方向にある。　**面積**　残存8.42㎡　推定12.32㎡

竈　東壁の南よりにある。煙道は床面からごく緩やかに立ち上がり、壁外へ65cm張り出す。天井部と袖部はローム土中心の構築材で築かれ、焚き口部は1号住居と同石材の割れ石を使っている。火床は住居の壁より内側にあり、床面より3cmほど窪んでいる。火床中央には自然石を使った支脚が据えられている。

壁　他の2軒に比べ、上方へ向かって開き気味になる。壁高は最も残存する北辺で55cm、状態の悪い西辺で30cmほどである。



第13図　3号住居

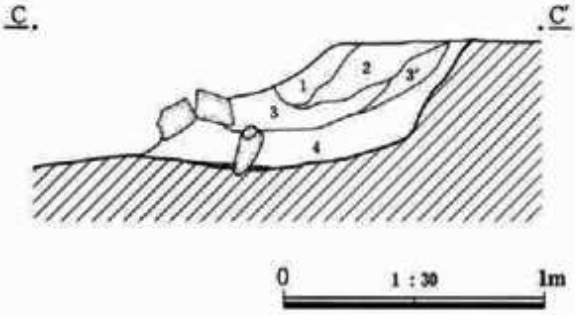
壁溝　竈下と竈南脇以外で床面が確認できた範囲では、壁直下に巡っている。幅は10cm前後、床面からの深さは4～6cmである。

貯蔵穴　竈南脇には床にローム土による外堤状の僅かな高まりがある。貯蔵穴外周に見られる施設であり、土層断面では確認できなかったが南東隅には貯蔵穴があったと思われる。

柱穴は確認できない。

床面　ローム面をそのまま床面とし、4号住居との重複部分は不明瞭であるが黒色土中心の貼床を構築している。踏み固めはしっかりしている。床面には細かな凹凸があり、中央が僅かに高くなる傾向がある。壁際を中心に細かな炭化材が出土している。床面の著しい被熱痕跡もなく、1号住居と類似する炭化材出土状態である。

出土遺物　前述の2軒の住居と比べ出土遺物は極端に少ない。図示した土器は1のみである。重複する4号住居の埋没土出土破片から接合復元した土器である。歪みが強いうえ、口縁部の残存が僅かで、径・傾きともに確実ではない。器面には磨きに近い細かなへら削りが施され、内面の整形も比較的丁寧である。器形や整形の特徴および胎土から土師器甕または甑と推定した。



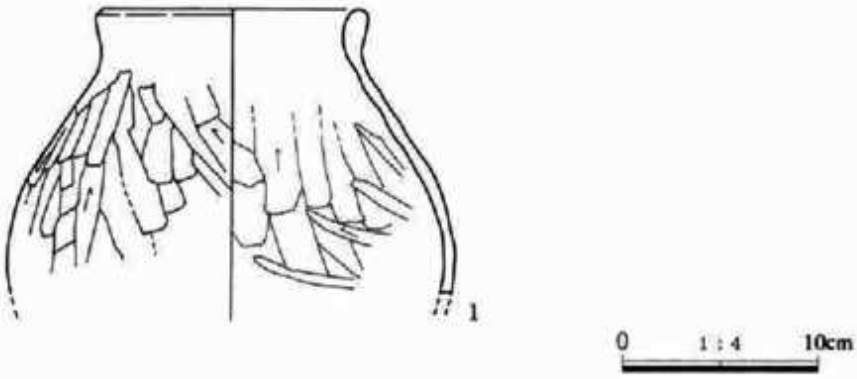
竈断面

1　黄褐色土層　ローム土中心の竈天井部構築材。

2　暗赤褐色土層　ローム土と黒色土の混合土に、大粒の焼土ブロックが混じる。

3　黒褐色土層　竈掛け口からの流れ込み土で、住居埋没土に同じ。下側に焼土粒少量含む。3'は煙道部からの流れ込み土で、ローム粒やや多い。

4　暗赤褐色土層　焼土ブロック主体だが、灰や炭化物の混入は少ない。崩落した一次天井の可能性。



第14図　3号住居竈断面および出土遺物

3　遺物観察表

1号住居

№器形	計測値(cm)・残存度	成形・整形技法の特徴	備　　考
1 杯蓋 須恵器	口(14.8) 高4.5 口縁1/3、底部ほぼ完存。	右回転ロクロ成形。底部途中まで回転ヘラ削り。口縁内端凹線巡る。ロクロ痕やや弱い。	①砂質。石英混じりの白色細粒鉱物やや多い。 ②硬調。 ③褐灰色。断面赤色味帯びる。
2 杯蓋 須恵器	口13.9 高4.2 口縁上半1/2欠く。	右回転ロクロ成形。底部左回転ロクロ上でヘラ削り。口縁内端弱い凹線巡る。底部厚く重量。ロクロ痕弱い。外面に焼成前の線刻あり。	①パミス混じりの粗砂多い。 ②断面まで酸化焔だが、二次的焼成か。 ③濁赤褐色で断面までほぼ一様。 ④器面は被熱により脆弱化している。
3 杯 土師器	口14.4 高5.5 完形。	底部外面全体に強いヘラ削り。内面は平滑に仕上げる。	①緻密な素地に微細な礫を含む。 ②土師器としては硬調。③淡褐色。 ④内面のハゼ多い。
4 杯 土師器	口13.4 高5.2 3/4個体。	底部外面全体にやや強いヘラ削り。内面は平滑に仕上げる。口縁やや歪み、平面はややいびつになる。	①ざっくりとした素地で重量。パミス混じりの粗砂やや多い。②土師器としてはやや硬調。 ③外面暗褐色。内面黒色で光沢あり。黒色処理の可能性。
5 杯 土師器	口12.0 高4.8 完形。	底部のヘラ削りは乾燥が進んだ状態で行い、器面に弱い光沢。内面は平滑に仕上げる。口縁上端やや尖る。	①輝石、赤色鉱物等の細かな混入物やや多い。 ②やや軟調。 ③赤褐色で断面までほぼ一様。
6 杯 土師器	口15.2 高4.9 完形。	底部のヘラ削りは丁寧で鋭く、擦痕が残る。内面は同心円状のナデで平坦に仕上げる。口縁外端僅かに肥厚。	①緻密で混入物少ない。②やや硬調。 ③淡い赤褐色で一様。 ④内面の深いハゼ多い。
7 杯 土師器	口(14.4) 高4.0 1/2個体。	底部のヘラ削りはやや雑。内面の仕上げは丁寧で周縁に同心円状の鋭い擦痕の残るナデ。やや厚手で重量あり。	①パミス混じりの粗砂の混入やや多い。 ②普通。 ③赤褐色～暗褐色で一様でない。
8 杯 土師器	口14.4 高3.4 ほぼ完形。	底部のヘラ削りはやや雑だが、乾燥が進んだ状態で行い、器面に弱い光沢。内面の仕上げは丁寧。	①パミス混じりのやや大粒の混入物含み、ザックリしている。②普通。 ③淡褐色。一部に黒斑あり。
9 杯 土師器	口11.8 高3.9 ほぼ完形。	底部のヘラ削りは強く鋭い。内面はやや凹凸があるが、丁寧なナデで平滑に仕上げる。口縁外面は窪む。	①素地はザックリしていて軽量。パミス混じりの粗粒やや多い。②普通。 ③淡褐色で断面までほぼ一様。
10 杯 土師器	口11.8 高3.8 口縁4/5、底2/5。	底部は強いヘラ削り。内面は同心円状の擦痕の残る鋭いナデ。薄手で軽量。平面はややいびつになる。	①素地やや緻密。細粒以外の混入物も少ない。 ②やや軟調。 ③淡い赤褐色でほぼ一様。
11 高杯 土師器	口17.3 脚裾14.2 高18.5 ほぼ完形。	坏部は内面は丁寧に仕上げる。口縁外面は強いナデで深い擦痕残り、上半のみナデやや雑。脚柱部は内面に弱い接合痕が残る。外面は細かく長いヘラ削り。	①素地やや緻密。輝石・パミス混じりの細粒少量含む。 ②土師器としては硬調。 ③淡い赤褐色。脚裾部に黒斑あり。
12 台付甕 土師器	台裾(12.8) 台裾部1/3 台部ほぼ完存。	器面脆弱化して整形痕はほとんど観察できない。内面の仕上げは雑。接地面平坦。厚手で、特に体部と台部の接合部分は分厚く重量。	①素地はザックリしていて。パミス・細礫混じりの砂粒多い。②普通。③淡い灰褐色。体部内面黒色味強い。④強い二次火熱を受ける。
13 小型甕 土師器	口14.4 胴15.7 高［14.0］ 上半完存、下半1/3。	外面削りは息長くやや強い。口縁部のナデはやや弱い。内面は脆弱化して整形痕はほとんど観察できない。12と同一個体の可能性あり。	①②12に類似する。 ③外面淡い赤褐色。内面黒褐色。 ④二次火熱を受ける。
14 甕 土師器	口24.5～25.7 底 8.6 高26.7 ほぼ完形。	外面乾燥が進んだ状態で細かく強いヘラ削り。内面のナデは弱いが、器面は平滑。口縁上端は上方へつまみ上げる。底部は内面に雑なヘラ削りで面取り。	①大型品としては素地緻密。パミス・細礫混じりの粗粒の混入やや多い。 ②普通。 ③淡褐色外面に２カ所の黒斑あり。
15 甕 土師器	口(15.8) 頸12.6 胴 20.5　底 5.9 高25.2 口縁部1/3、他は完存。	外面ヘラ削りは下半で強いが、上半は弱く細かい。内面のナデは口縁部のみ鋭い擦痕が残り、胴部は弱いが器面は比較的平滑に仕上がる。	①ややボソボソの素地に、石英・パミス混じりの砂粒をやや多量に含む。②普通。 ③上半淡い褐色。下半黒褐色。 ④下半に弱い二次火熱を受ける。

No.器形	計測値(cm)・残存度	成形・整形技法の特徴	備　　考
16 甕 土師器	口18.3 頸15.2 胴20.5 底 4.7 高26.3　口縁～肩部 3/4、他は完存。	外面のヘラ削りは弱く、輪積み痕状の凹凸が器面に残る。内面は脆弱化して整形痕不明瞭。外面底部に木葉痕あり。	①素地ややポソポソで、不揃いのパミスの目立つ砂粒含む。②普通。 ③淡い褐色。下半中心に黒色味強いムラあり。 ④下半に二次火熱を受ける。
17 甕 土師器	口18.2 頸15.4 胴20.4 底 6.4 高34.7　完形。	外面のヘラ削りは幅広で息長く強い。口縁の仕上げはやや雑で、小さな歪みあり。内面のナデも強い。	①パミス混じりの砂粒の混入多い。②普通。 ③淡い褐色。黒・赤色味帯びるムラあり。 ④下半にやや強い二次火熱を受ける。
18 壺 土師器	口18.7 頸17.1 胴(30.0) 口縁完存、胴上半2/3。	外面のヘラ削りは乾燥が進んだ状態で行い、器面にツヤあり。口縁のナデは強い。頸部内面に接合痕残る。	①素地普通。片岩粒の混じる砂粒の混入多い。 ②普通。 ③淡い赤褐色。内面・断面は黄色味を帯びる。

2号住居

No.器形	計測値(cm)・残存度	成形・整形技法の特徴	備　　考
1 長頸壺 須恵器	胴(11.6) 台 7.0 図示部の3/4。	右回転ロクロ成形。回転糸切りか。高台貼り付け。内面のロクロ痕強く、外面は工具により整形か。	①素地やや砂質。黒色鉱物を含む。②硬調。 ③灰色。断面は黄色味を帯びる。 ④肩部に黄色味を帯びた自然釉かかる。
2 鉢 土師器	口 11.9　高 7.0 完形。	外面のヘラ削りは弱いが丁寧。内面も丁寧に仕上げるが、剥落すすみ不明瞭。口縁は小さな波状に歪む。	①素地やや緻密で輝石・石英混じりの細粒の混入やや多い。②普通。 ③淡い赤褐色でほぼ一様。
3 小型甕 土師器	口 13.9　頸12.4 胴 15.5　底 5.7 高 15.1 ほぼ完形。	外面のヘラ削りは幅広で強く、息長い。内面のナデは弱く、輪積み状の接合痕が明瞭に残る。	①素地普通。砂粒の混入やや多い。 ②普通。 ③淡い褐色～赤褐色。
4 甑 土師器	口(23.4) 底(9.6) 高(20.5) 図示部の1/3	薄手。外面のヘラ削りは丁寧でやや鋭い。内面は縦位のヘラ磨きで平滑に仕上げる。底部の仕上げも丁寧。	①やや大粒のパミス混じりの細粒含む。 ②普通。③淡い褐色～黒褐色、一様でない。 ④破損後に二次火熱を受ける。
5 甑 土師器	口 18.4　底 9.7 高 21.7 完形。	外面は細かいが鋭いヘラ削り。器面に弱い光沢。口縁部のナデは鋭い。内面は縦位の弱いヘラ磨きで平滑に仕上げる。底部の仕上げは雑。	①素地ややポソポソ。細かな輝石・パミス混じる細砂含む。大型品としては緻密。 ②やや硬調。 ③赤褐色。外面に大きな黒斑あり。
6 甕 土師器	口 17.2　頸14.5 胴 18.0　底 4.5 高 29.9 ほぼ完形。	胴部下半に接合の大きな段差あり。外面ヘラ削りは大型品としては丁寧。口縁部はやや鋭い擦痕の残るナデ。内面は比較的平滑に仕上げる。	①5の甑に近い。 ②普通。 ③淡い赤褐色。下半は黒色味強い。 ④二次火熱を受け、下半部やや脆弱化。
7 甕 土師器	口 18.0　頸16.8 胴 21.0　底 7.9 高 22.2 完形。	外面は弱いヘラ削りだが、器面は比較的平滑。内面は整形痕がほとんど残らない弱いナデだが、器面は平滑。底部は上げ底状に中央が窪む。	①素地やや緻密。細かなパミス・石英等の混じる細砂含む。②大型品としてはきわめて硬調。 ③淡い褐色。黒斑あり。 ④内面上半に不明瞭な付着物。

4　縄文時代の遺構と遺物

(1)　4号住居

4号住居

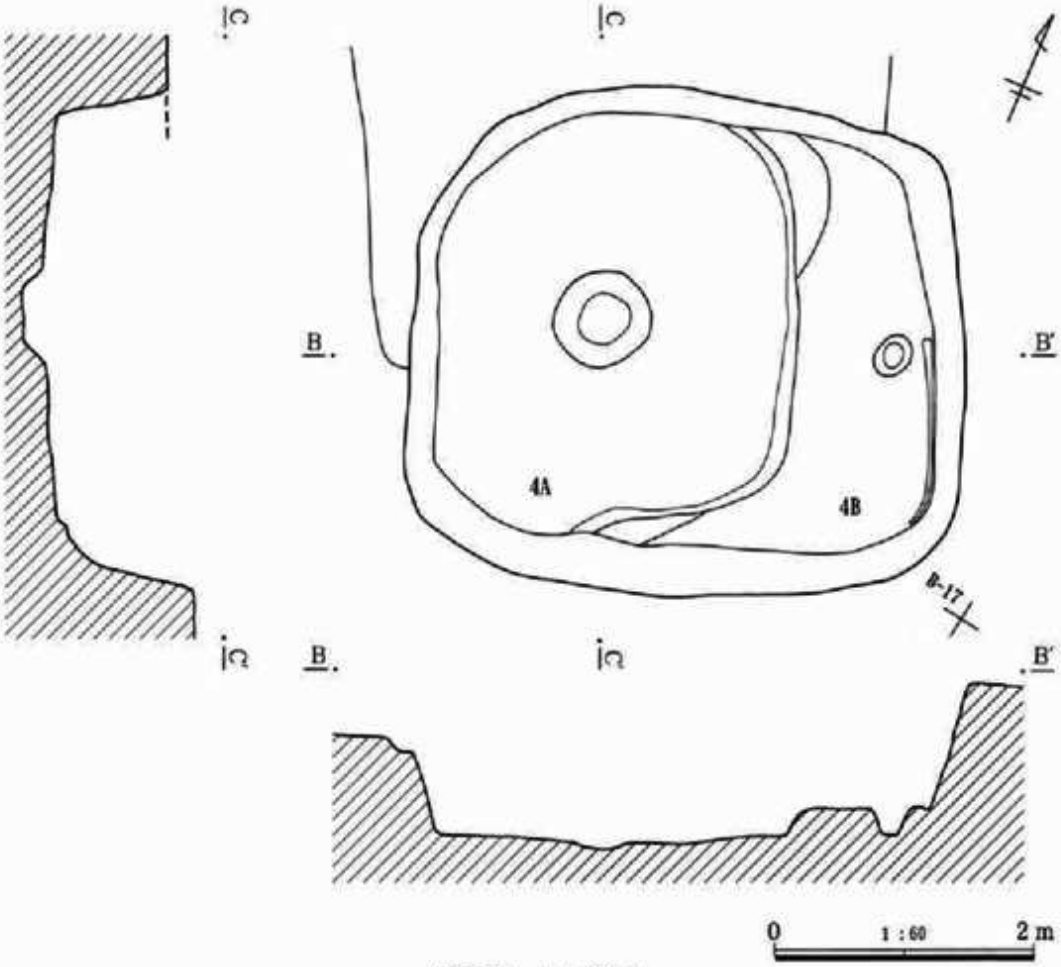
位置　B－16グリッド　**面積**　9.78㎡

3号住居と重複し、北西側の壁を壊されているが床面には影響ない。ローム上面では本住居を確認できず、古墳時代の3号住居掘り下げ中に、床下にさらに別遺構のあることに気付いた。さらにこの住居には約20cmの高低差を持つ2枚の床があった。これを重複する2軒の住居と考え、南側の深い4A住居・東側に床が残る4B住居としたが、不明瞭な部分も多い。A住居の埋没土の観察で、B住居の床面は確認できず、2軒の住居であれば、A住居が後出すると思われる。

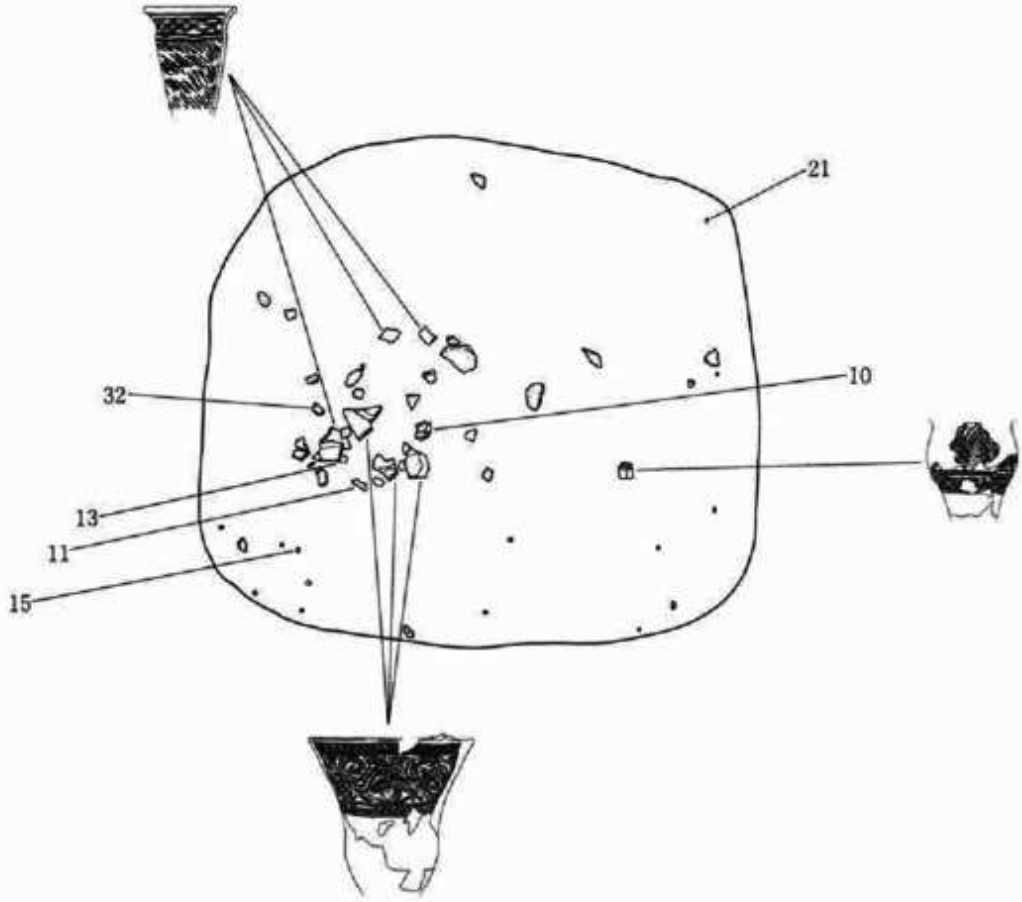
4A号住居

形状と規模　長軸3.4m、短軸3.0mの著しく隅の円い長方形となる。

主軸方向　N－69°－E　4号住居全体の長軸方向にほぼ直行している。



第15図　4号住居



第16図　4号住居遺物出土状態

壁　残存状態の良い南東隅で110cmの高さがある。直線的に立ち上がっている。

床面　ローム面をそのまま踏み固めた比較的平坦な床面である。**柱穴や壁溝**は確認できない。

炉　住居ほぼ中央に炉穴と思われる78×70cm、深さ17cmのくぼみがある。埋没土はローム状土主体で焼土や炭化物が少量混じる不明瞭なものであった。壁面や底面に被熱痕は観察できない。出土遺物は炉の周辺に集中していた。

4B号住居

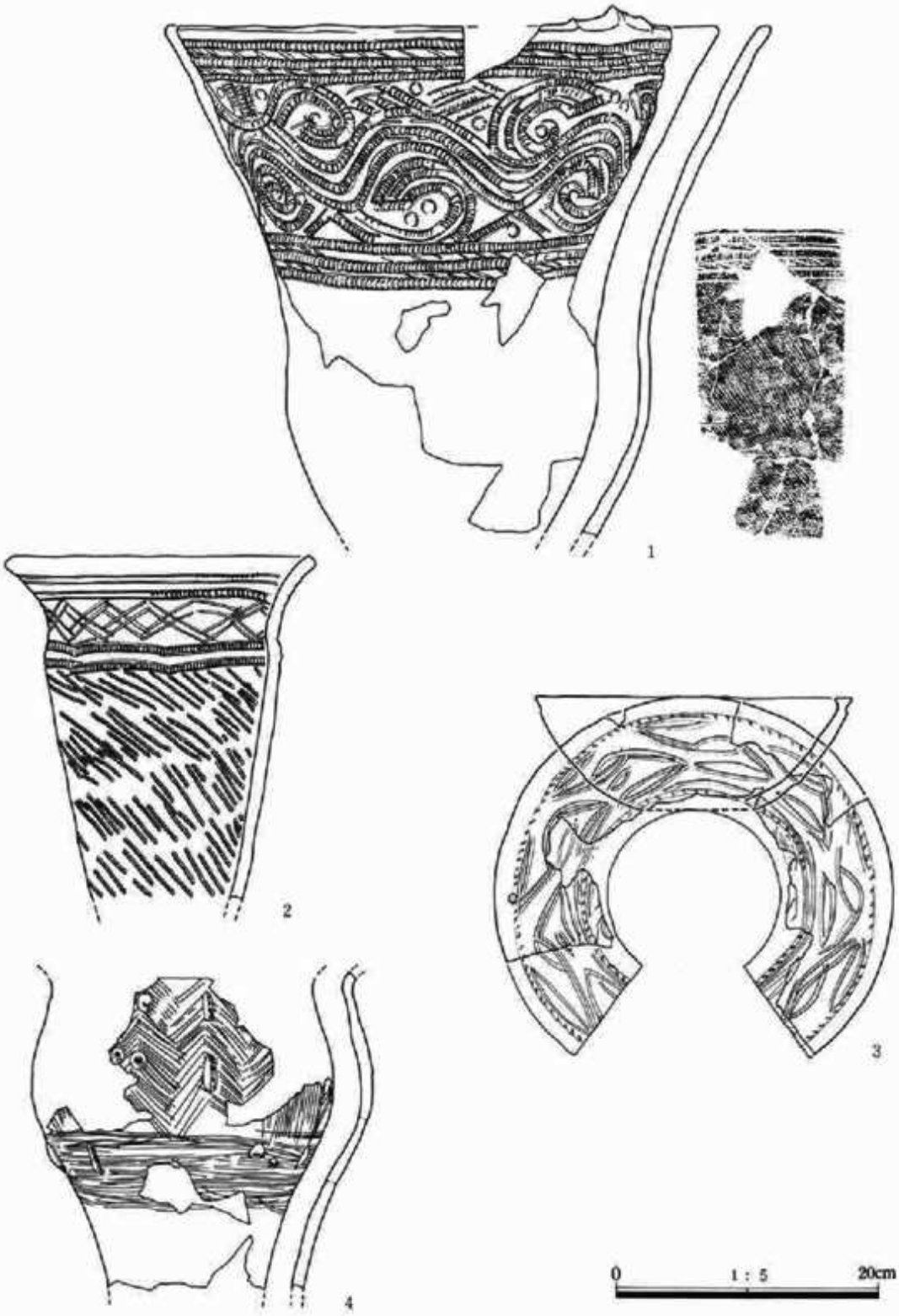
形状と規模　東辺の長さ3.1m。南・北辺は不明だが最大で4.3mとなる。

壁　東壁は約100cmの高さがあり、A号住居同様の立ち上がりである。

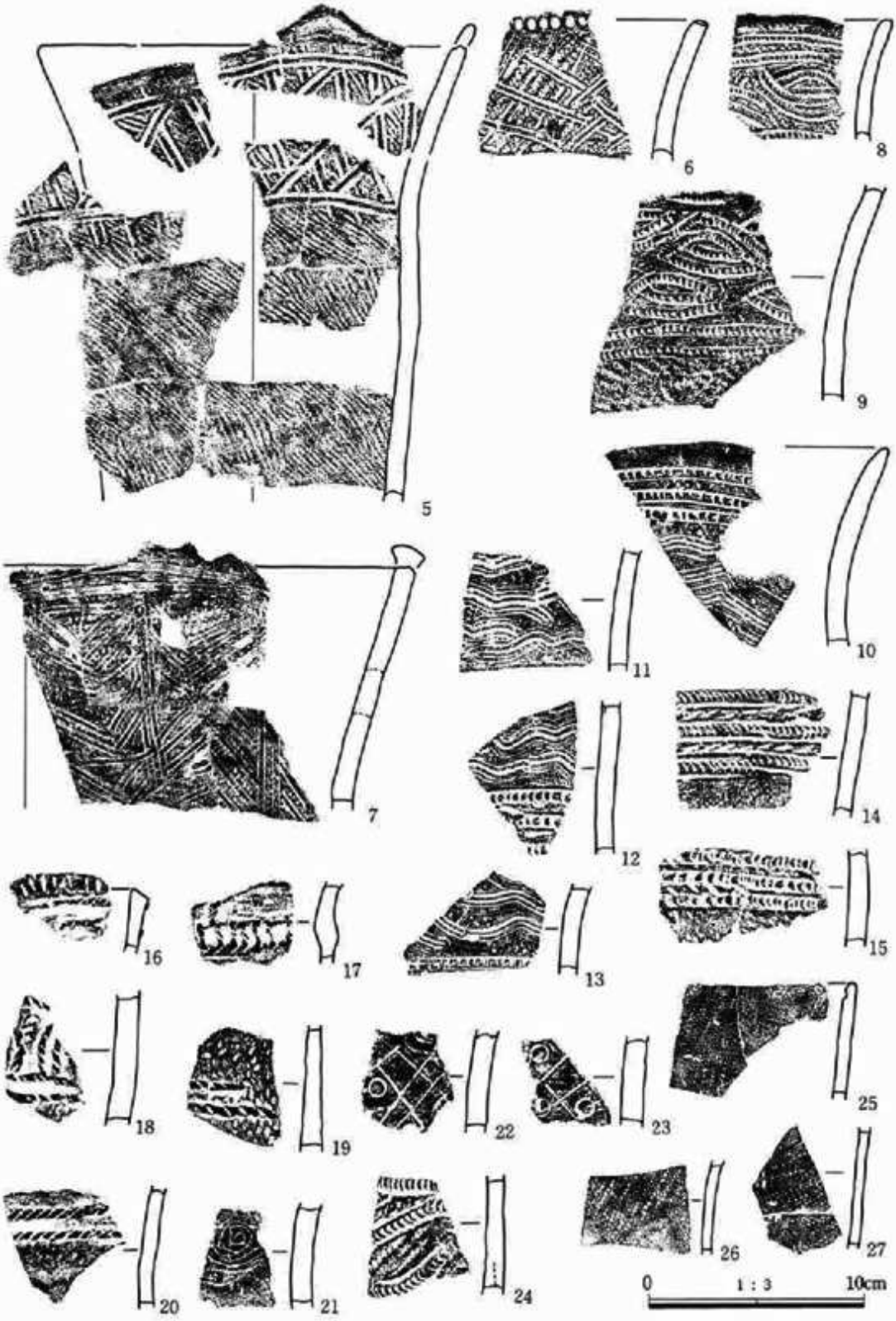
壁溝　東壁下に幅5cm前後、深さ2cm前後の壁溝状のくぼみを観察した。埋没土は若干黒色味をおびるが、不明瞭なものであった。

床面　ローム面をそのまま踏み固めた比較的平坦な床面である。

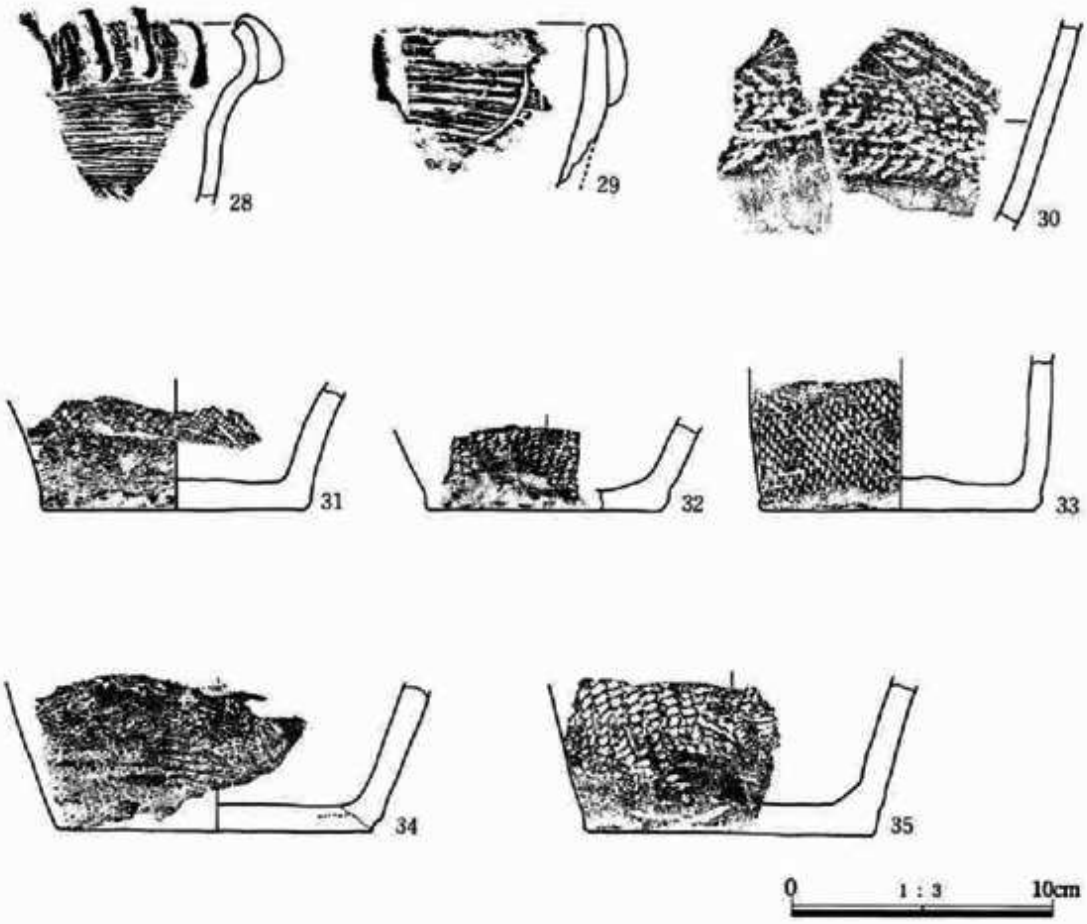
ピット　北壁下に34×26cm、深さ21cmの用途不明の小ピットを確認した。



第17図　４号住居出土遺物（１）



第18図　4号住居出土遺物(2)



第19図　4号住居出土遺物(3)

(2)　4号住居出土遺物

遺物の出土状態　第17～19図の1～35は4号住居出土の遺物である。1は1/2個体、2は底部を除きほぼ完形まで復元できた土器で、4B号住居床面の出土である。4は4A号住居の床上40cmの出土である。11・13・32はA住居の中央東よりの床ほぼ直上、15は東隅壁寄りの床上30cm、21はA住居の西壁際床上30cmの高さの出土である。その他の土器は住居の埋没土から出土している。定形的な石器の出土はないが、土器にまじって剝片類や自然石が出土している。

遺物の特徴　5～27は諸磯b式土器である。5～7は直線的な竹管文を配したもので、8・9は曲線的な弧状の竹管文を配している。10～13は櫛描き状の沈線文である。14・15は平行沈線文の中に爪形文が付く。16～21は刻みの付く浮線文である。22・23は格子の沈線文の中に円形竹管文がある。1にも円形竹管文があるが、ともに諸磯b式であろう。28・29は諸磯c式、30は浮島式系の土器であろう。

31～35に底部破片を集めたが、外底面に網代痕や木葉痕が残るものはない。

(3)　包含層出土遺物

第20～24図は包含層出土の土器である。

1～16は撚糸文土器群である。1～3は同一個体である。器面に撚糸原体が押し引きされている。5・8は原体の圧痕文がある。この種の撚糸文は原体が細かく、12・13などが胴部になろう。4・9は無文であり、4は口唇直下に沈線が巡る。9は小型で口径の広い土器であろう。

17～38と55～62は条痕文系の土器群である。すべて表裏ともに条痕文が施されているが、ほかの文様は見られない。17は器形が分かる唯一のもので、胴部のカーブから尖底であると思われる。55～62はこの時期の底部で、すべて尖底である。おそらく18も同様の器形であろう。19～38も条痕文の施文方法から同時期のものと考えられるが、型式細別が不可能である。茅山式の古式段階と理解したい。

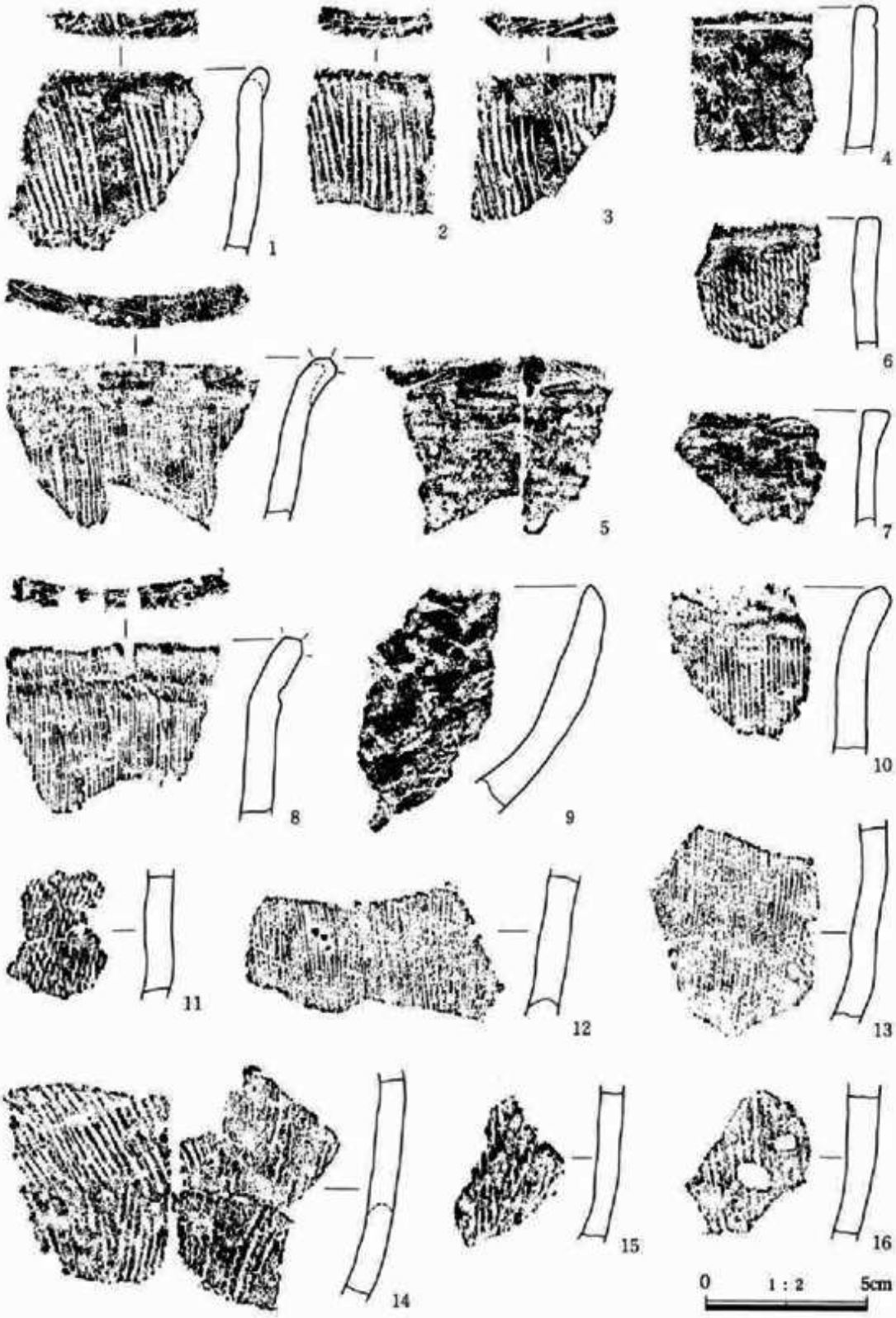
39は小破片であるが、絡条体の圧痕文があり、子母口式土器である。

40・41は赤褐色をした焼成で、緻密な胎土である。40の口縁部は外側に削ぎ取られている。文様は沈線文のみであり、田戸下層式土器である。

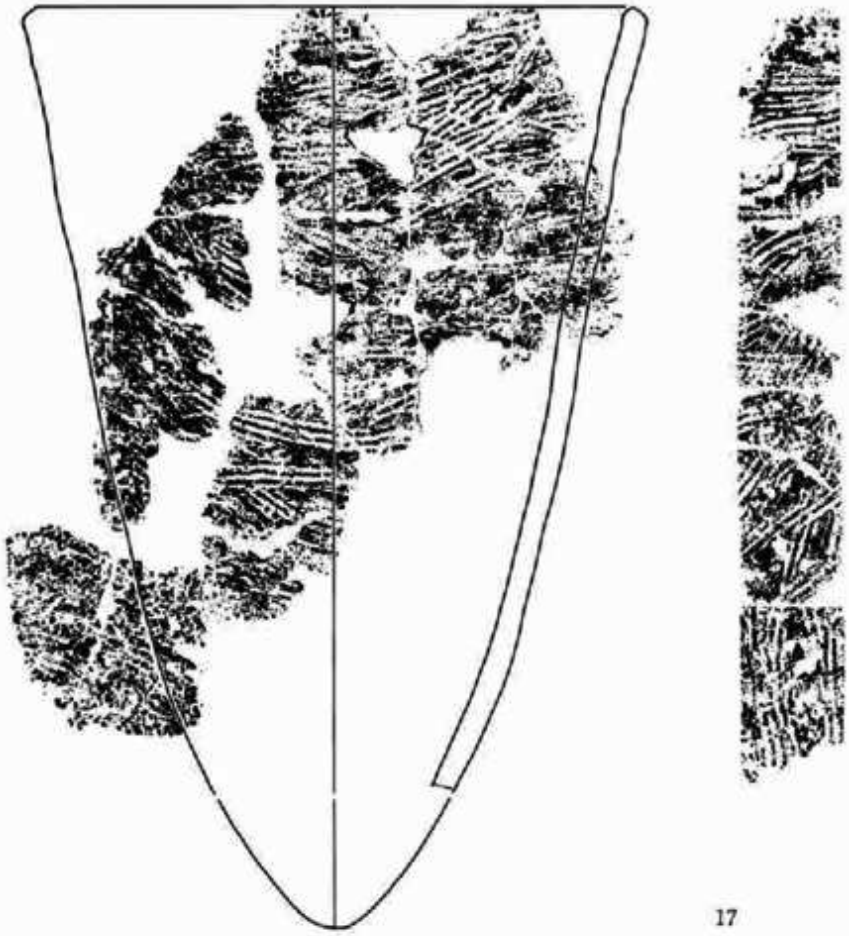
42～52と63～84はほぼ同時期と思われる土器を一括したが、型式細別で不明な点が多い。いずれも繊維を含み、7ミリ前後の薄い作りである。縄文を中心とした文様施文である。裏面を図化したものは、条痕文が見られるものである。42は縄文地の上に沈線で文様が加えられている。裏面に条痕文があり、平らな口唇部に点状の押捺がある。地文の縄文は菱形を構成しており、48はこの土器の胴部かもしれない。43は刻みのある口唇部の直下に撚糸圧痕文があり、その下に三条の刻みのある隆帯が続く。花積下層式土器である。44～46は縄文のみの土器であるが、いずれも縄文の二度転がしが見られる。49～52は縄文のみの土器であるが、大きな特徴をもたない。胎土や器厚に共通点があるためにここに掲げた。63～65は平らな口唇部に撚糸の回転による施文がある。縄文は反りの撚りの加わった多条なものである。裏面にはうっすらと条痕文が見られる。66は52と酷似する。70は波状の口縁部を持つ。71は明らかに菱形を構成する縄文が施されている。裏面は条痕が認められないが、擦痕がある。63～84はいずれも表面に縄文、裏面に条痕文のある土器の小破片である。77・80のような明瞭に見える深い条痕もある。

53・54はこの種の土器の底部であろう。53は43の花積下層式のものであろう。底面に縄文がある。54は縄文が施されている。器形からすると尖底であり、縄文条痕のある土器群の底部の可能性が高い。

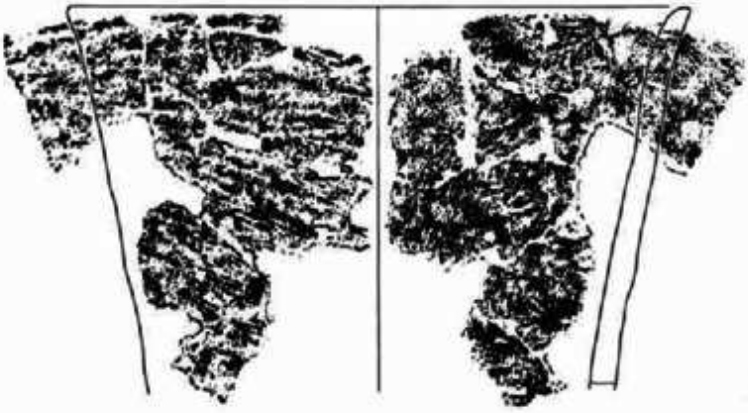
表面に縄文、裏面に条痕文のある土器群は県内でも数遺跡で出土している。しかし、それぞれ若干の相違がある。小野上村八木沢清水遺跡出土の縄文条痕土器は宮城県素山貝塚の資料に酷似しており、茅山上層式土器に併行するものと考えられる。本遺跡の資料は、それらに後出する早期末葉に位置する可能性がある。しかし、県内の花積下層式土器の実態が不明確な段階でもあり、前期初頭の可能性も含んでいると考えられよう。



第20図　包含層出土遺物（縄文土器1）



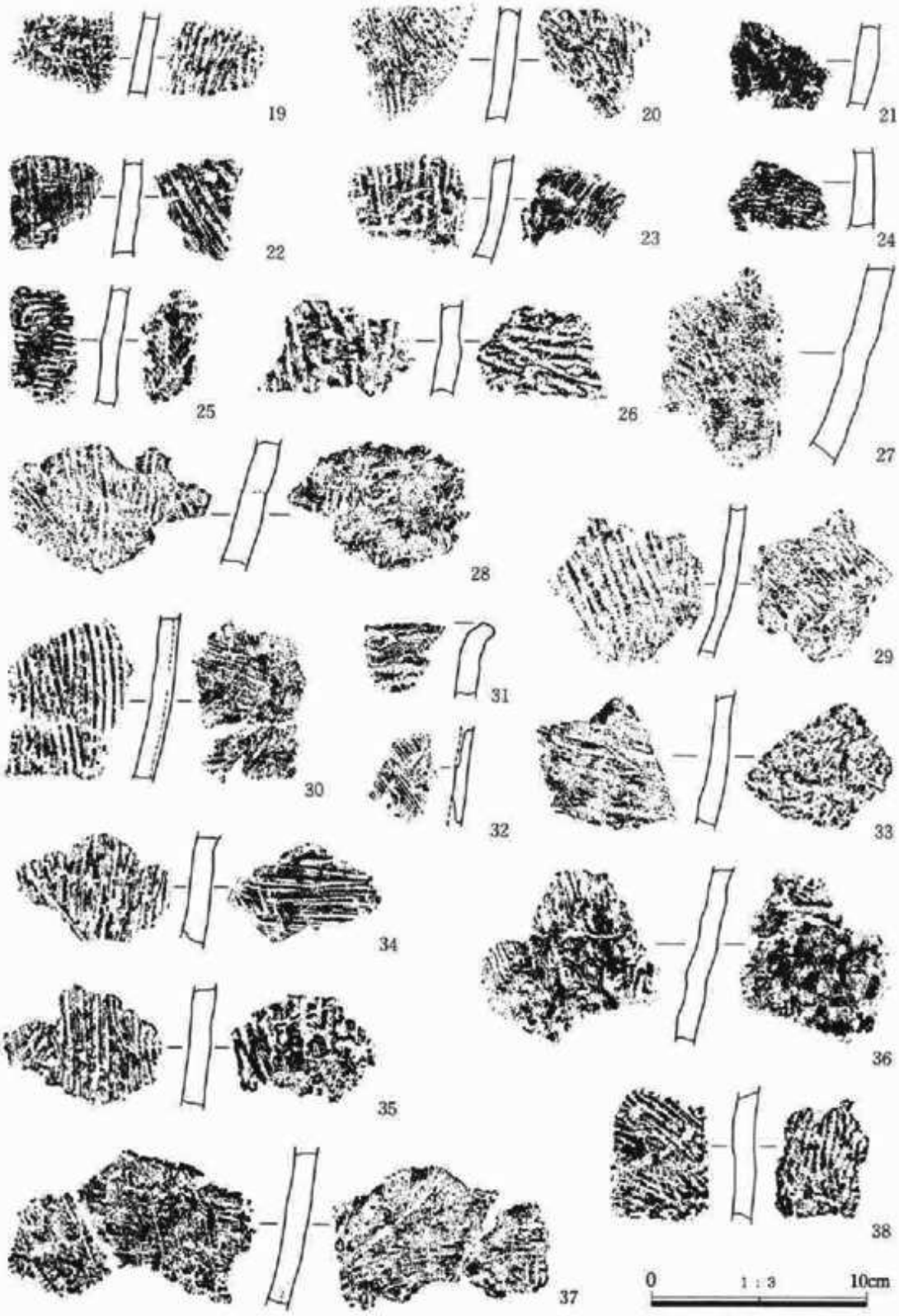
17



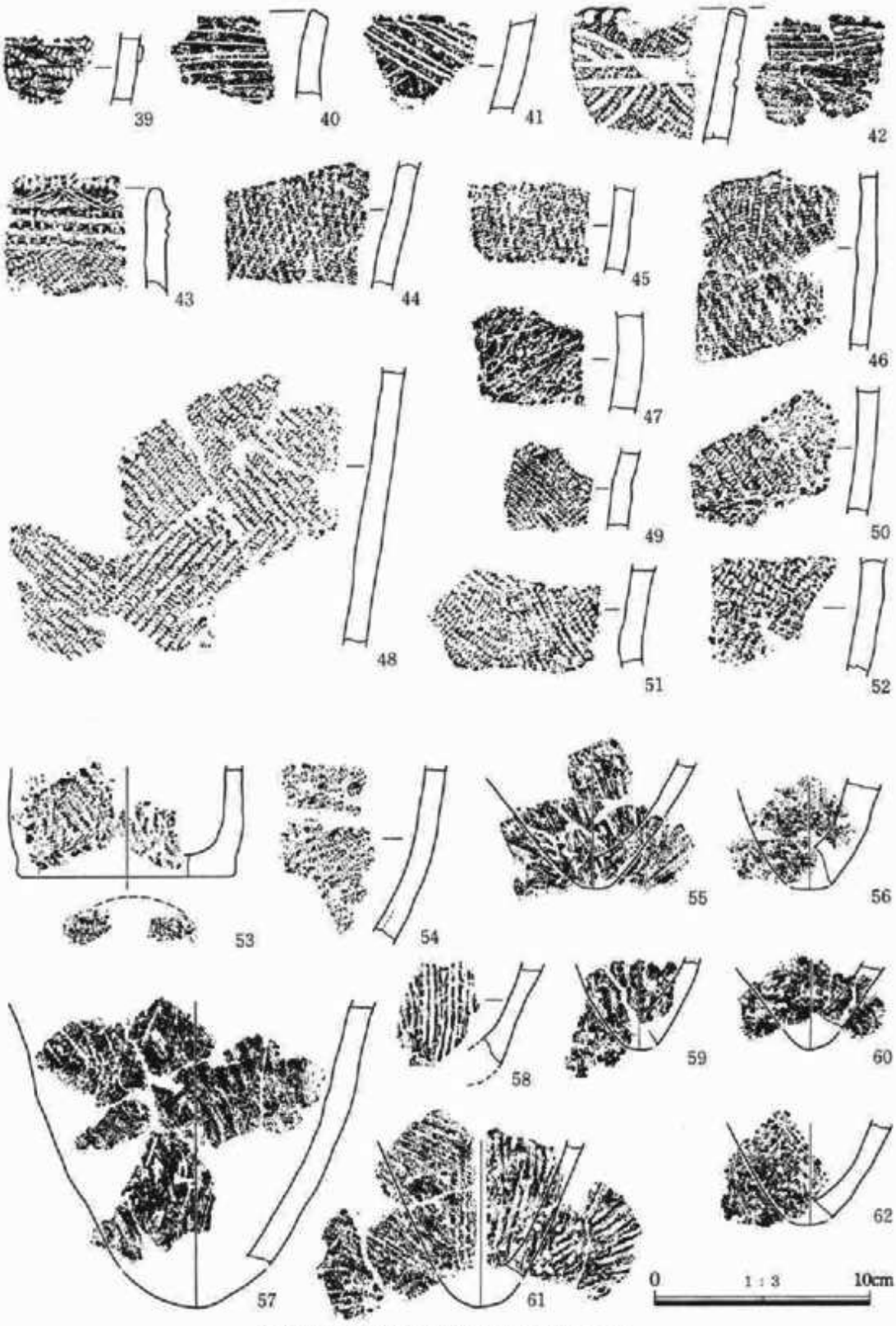
18

0　1：3　10cm

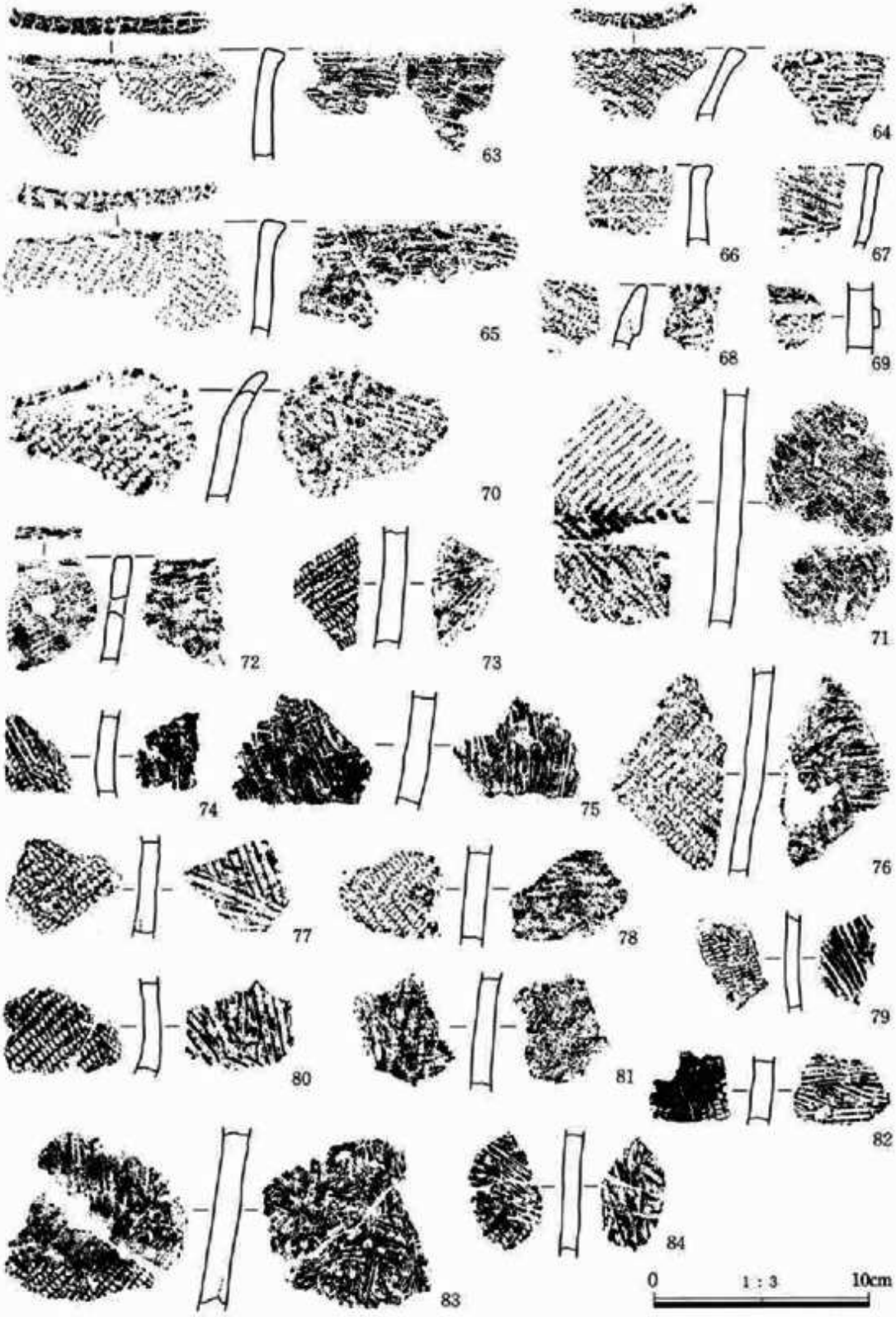
第21図　包含層出土遺物（縄文土器２）



第22図　包含層出土遺物（縄文土器３）



第23図　包含層出土遺物（縄文土器４）



第24図　包含層出土遺物（縄文土器５）

(4) ま と め

荒砥上諏訪遺跡出土の縄文時代遺物からは、図示した土器のほかに中期の加曽利E式、後期の称名寺式土器などが数片出土している。しかし、遺跡周辺での分布調査の結果でもこれらの時期の土器は少なく、大きな集落の形成はないであろう。すなわち、赤城山の山麓のうち丘陵性の地形を呈する地域は前期の小集落が多く分布し、中期の大集落は反比例する傾向があるが、本遺跡でも同様な状況が看取されたことになる。

(5) 石　　器

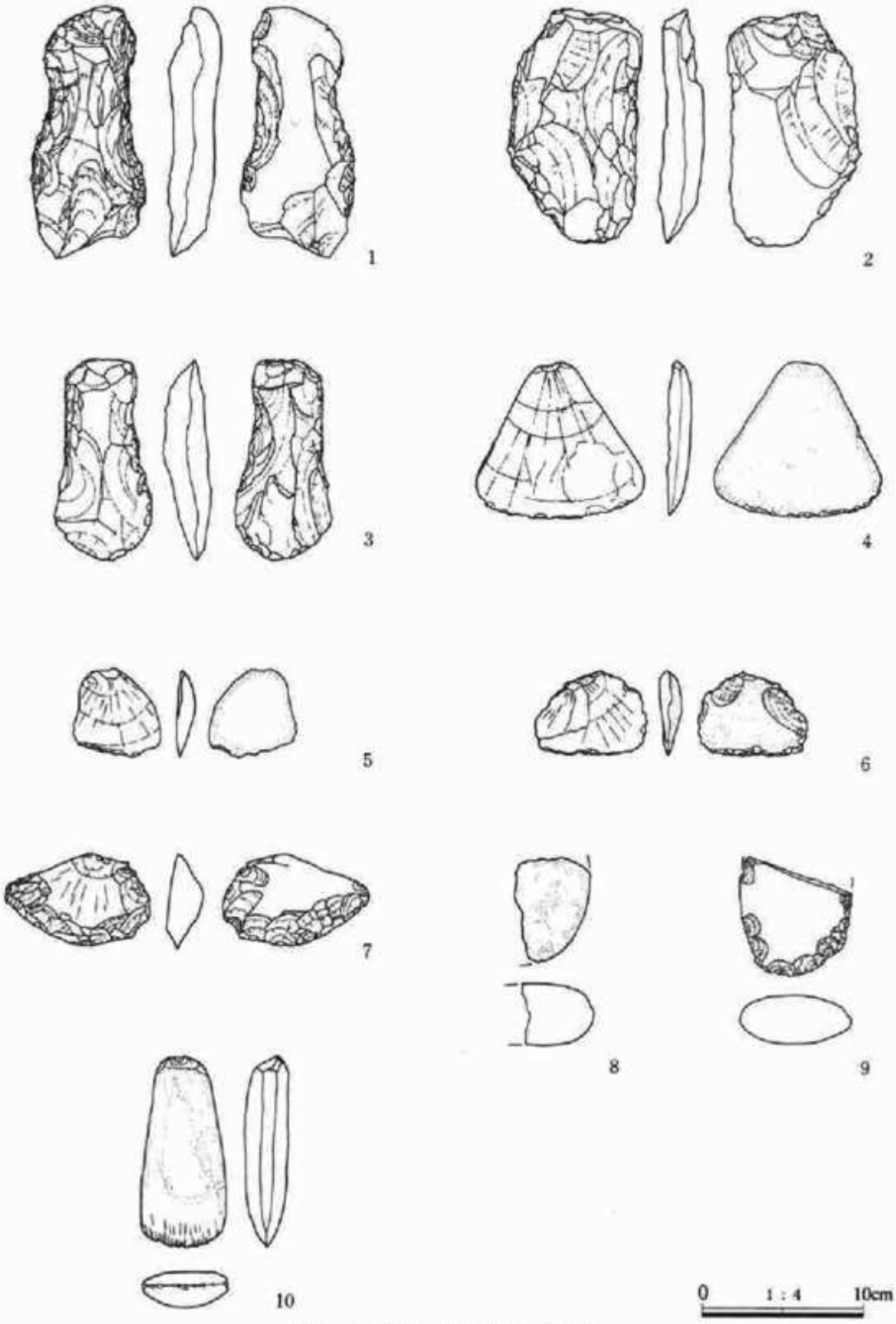
第25図は包含層出土の縄文時代の石器10点である。この他に剥片類の出土は多い。B区からの出土が多いが、4・8は4号住居にかかるA－17グリッドの出土である。

1～3は完形の打製石斧である。4・5は自然面を残したものである。4は母岩の第一打で得られた剥片を利用したスクレイパーで、5～7などと同じ機能のものであろう。8は凹み石の縁部小破片である。9は磨製石斧の破片であり、刃部の欠失が著しい。10は比較的小型の完形磨製石斧である。

石器一覧表

No.	種　　類	出土位置	長　さ	幅	厚みcm	重量g	石　　材
1	打製石斧	B区2761	15.6	7.0	2.9	341	黒色頁岩
2	打製石斧	B区2747	14.2	8.2	2.4	332	黒色頁岩
3	打製石斧	A区A－17G	12.4	5.9	2.8	208	黒色頁岩
4	スクレイパー	A区C－13G	9.6	10.5	1.5	148	黒色頁岩
5	スクレイパー	B区2761	5.0	5.4	1.0	31	黒色頁岩
6	スクレイパー	B区2761	5.1	6.8	1.2	44	黒色頁岩
7	スクレイパー	B区2747	5.6	9.0	2.2	121	黒色頁岩
8	凹み石	A区A－17G	[5.8]	4.6	4.0	[144]	粗粒輝石安山岩
9	磨製石斧	B区	[7.1]	6.9	3.2	[227]	変玄武岩
10	磨製石斧	A区B－21G	11.6	5.3	2.6	274	変玄武岩

出土位置のB区の地番については第3図を参照されたい。



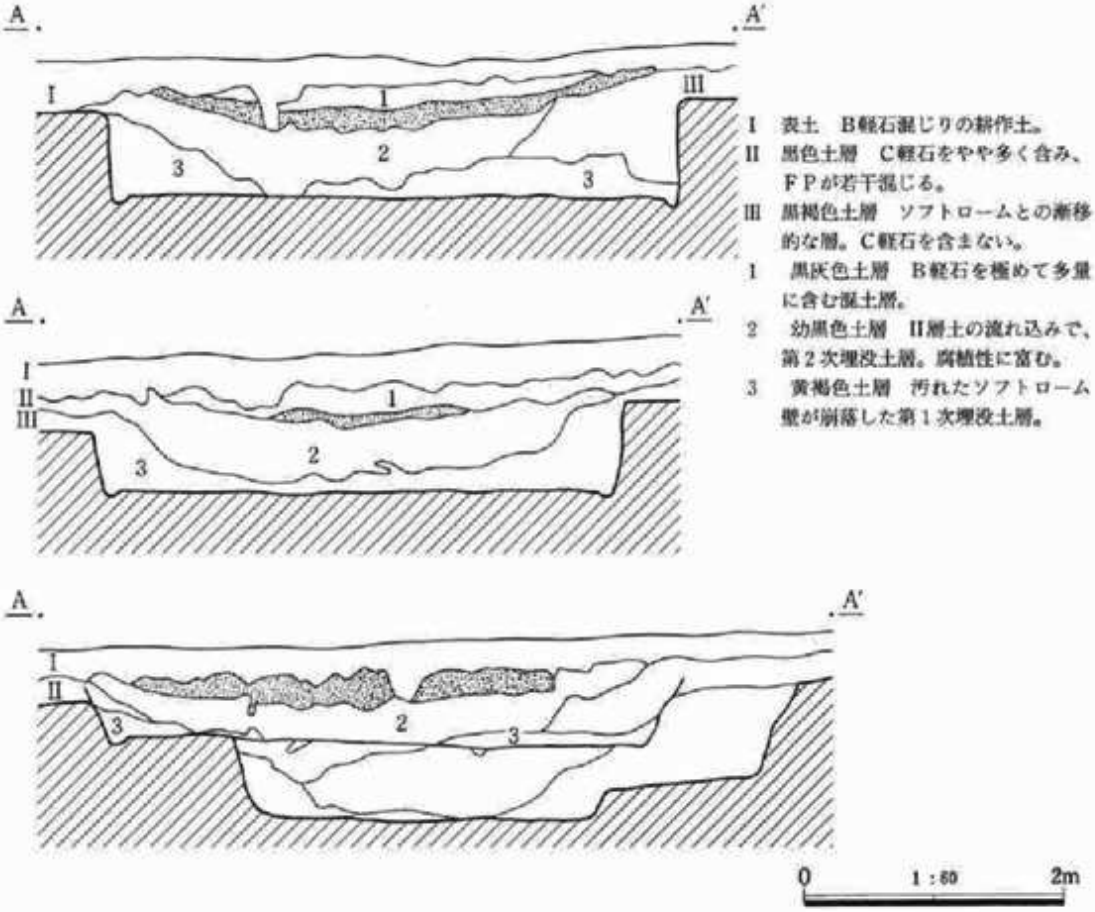
第25図　包含層出土遺物（石器）

第３章　成果と問題点

1　古墳時代の住居を覆う軽石について

第26図は本遺跡で調査した３軒の竪穴住居埋没土層観察の図である。図中のトーン部分は浅間山が天仁元年（1108）に噴火した際の降下火山灰（Ｂ軽石）を示したものである。降下物は上層では攪拌を受けているが、下半では火山灰と軽石のユニットが認められ、二次堆積ではないことが確認できる。本遺跡の東側に隣接する荒砥上諏訪遺跡Ｃ地点の古墳周堀でもＢ軽石が中央に５cm内外の層厚で観察されている。この付近では所々に古墳時代の窪みが平安時代末まで残っていたことが分かる。

なお、６世紀代に降下した榛名山二ツ岳を給源とするパミス（ＦＰ）も住居埋没土中に少量観察できるが、ＦＰが純層で確認できる場所はない。ＦＰ降下時期と住居の廃絶時期との先後関係を明らかにすることはできなかった。



第26図　竪穴住居埋没土の観察

2　古墳時代の集落について

本遺跡で調査した3軒の古墳時代竪穴住居の特徴と隣接する遺跡から、荒砥上諏訪遺跡の古墳時代集落の性格を類推してみたい。

・須恵器蓋について　1号住居から出土した2点の須恵器蓋は、天井部がやや扁平になるが、天井部・体部の稜はまだしっかりしている。畿内と群馬の土器を直接比較し陶邑編年(田辺編年)に従えば、1は口径14.7cmという大きさからMT15の時期に近いようである。6世紀の前半の年代観が得られよう。2もおおよそ同時期のものと思われる。C地点1号住居の須恵器蓋はA地点よりやや古い6世紀初頭ころの遺物と想定している。

・竪穴住居の特徴について　1号住居・3号住居の竈には粗粒輝石安山岩の割石を使用している。この礫は赤城山の山麓に一般的に見られるものだが、長さ30cm以上、幅15cm前後の角柱状に加工するのは住居の竈に使用するためには大仰なものである。古墳時代にこのような礫の加工を行う機会としては古墳の石室構築がある。本遺跡北側にある大室古墳群ほか、周辺には多数の古墳があり、作業場から不要材を持ち込んで竈を築いた可能性があろう。

3軒の住居間では遺物の出土状態には差が大きく、1号住居にのみ杯類が集中してみられる。反面、3軒とも炭化物の出土が多く、焼失住居と思われる共通点がある。杯類が食事に使用する器という前提で想像をたくましくするなら、食事は1号住居に付近の居住者が集まり、杯類のほとんど出土しない他の住居は寝所となるだけ施設ではなかろうか。現代に置き換えれば、土木工事現場の宿舎のような姿も想起されよう。工事終了後の不要となった住居は焼却したのではなかろうか。

・集落の性格について　狭い範囲の調査ではあるが、本遺跡に見られる古墳時代の集落は6世紀前半の短い期間に限定されている。C地点1号住居と同時代と思われるC地点2号住居は、古墳周堀に壊されており、古墳周堀はA地点の住居同様に浅間B軽石の純層が上面に堆積していた。

荒砥上諏訪遺跡のある台地から離れた遺跡と比較すると、荒砥五反田・荒砥上川久保・荒砥東原遺跡で古墳時代前期から平安時代まで継続される集落が広がっている。本遺跡は周辺に水田可耕地が広がり、古代村落の立地としては良好な位置だけに、一時期だけの集落のあり方に違和感がある。

前項で触れたように、本遺跡では平安時代末まで住居上面が窪んだままで、浅間B軽石が堆積している。古墳時代以降、この地が集落や畠地として活用されなかったことの証左となりそうである。本遺跡の周辺は古墳群構築の作業場として、後には古墳群が占地し、集落の展開が制限される区画であった、このように想定して、今後の資料の増加を待ちたい。

引用・参考文献　『荒砥上諏訪遺跡』　1977　群馬県教育委員会
『荒砥五反田遺跡』　1978　群馬県教育委員会

遺跡（A地点）遠景（西側低地部分から望む）

竪穴住居全景（西から）

▲１号住居　全景（西から）

◀１号住居　竈断面（南から）

１号住居　竈袖石確認状態▶

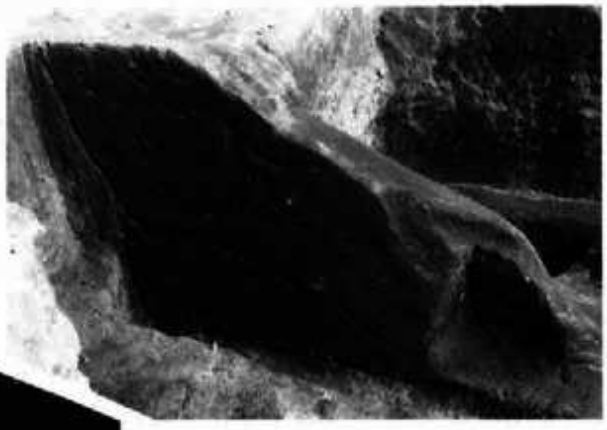
1号住居　竈と周辺遺物出土状態（西から）

1号住居　南側貯蔵穴と出土遺物

1号住居　北側貯蔵穴と上面出土遺物

1号住居　竈と周辺遺物出土状態（北から）

▲2号住居　全景（西から）



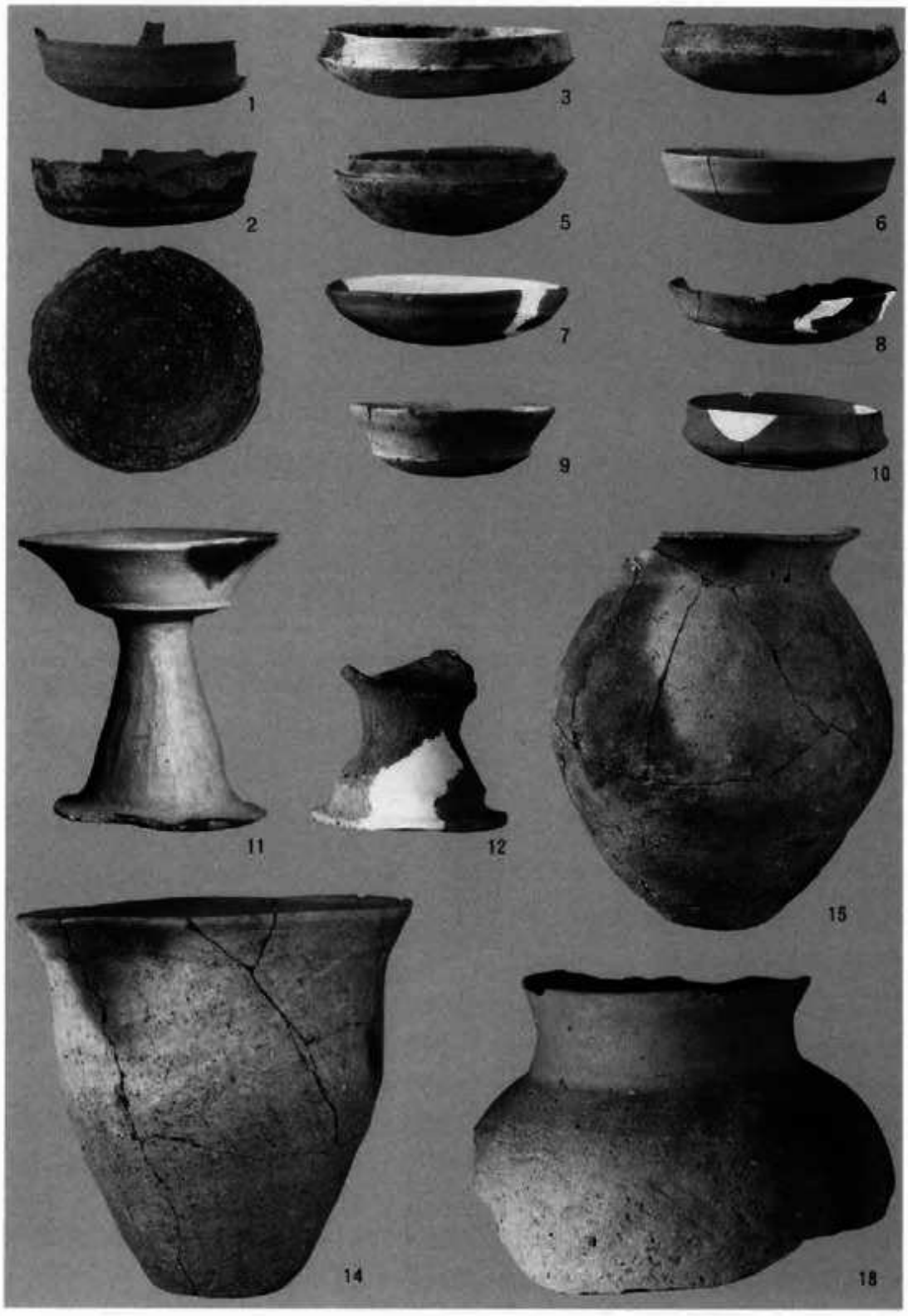
2号住居　竈断面（北から）▶

◀2号住居　竈と周辺遺物出土状態
（西から）

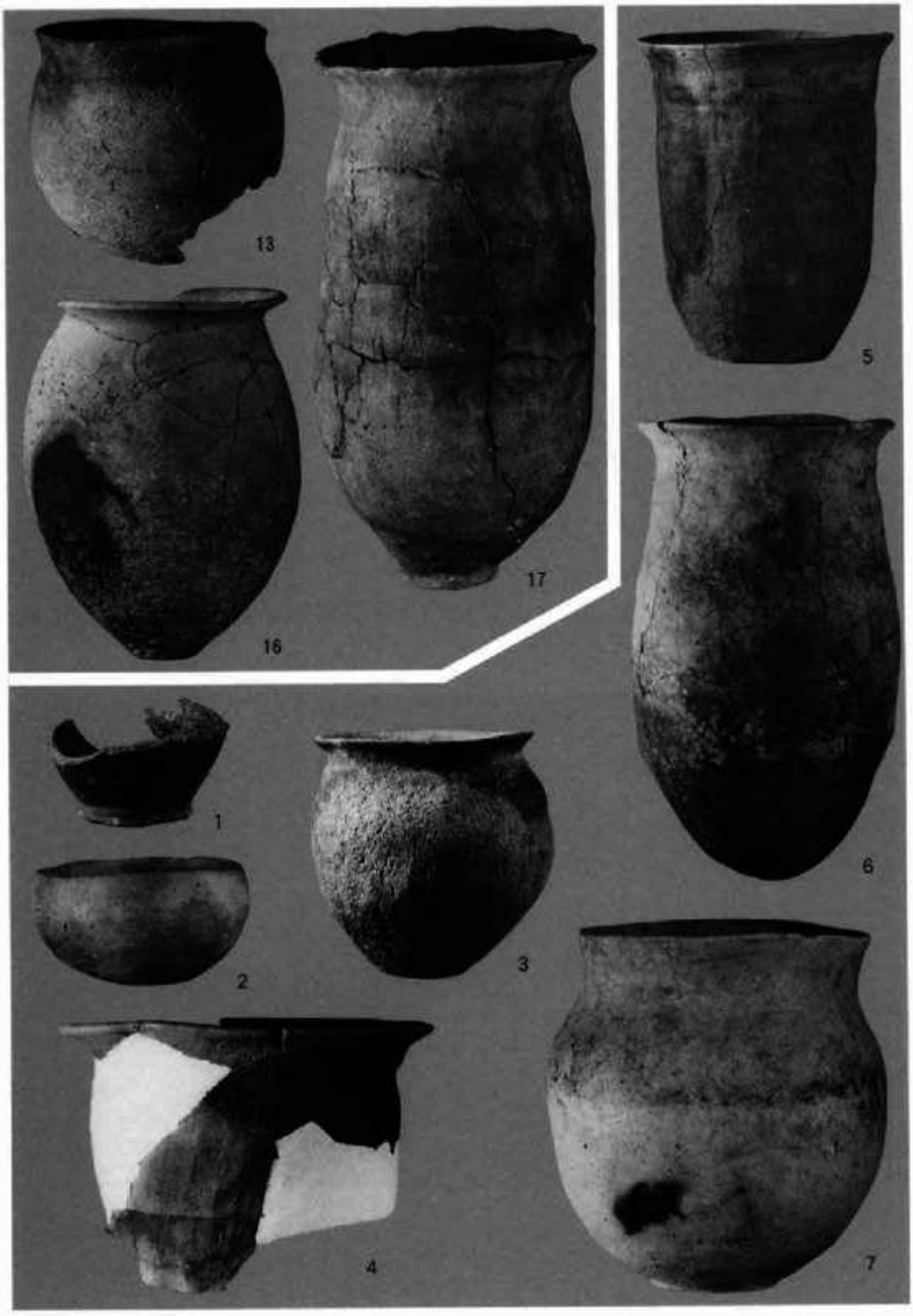
▲3号住居　全景（西から）

3号住居　埋没経過の確認（南から）▶

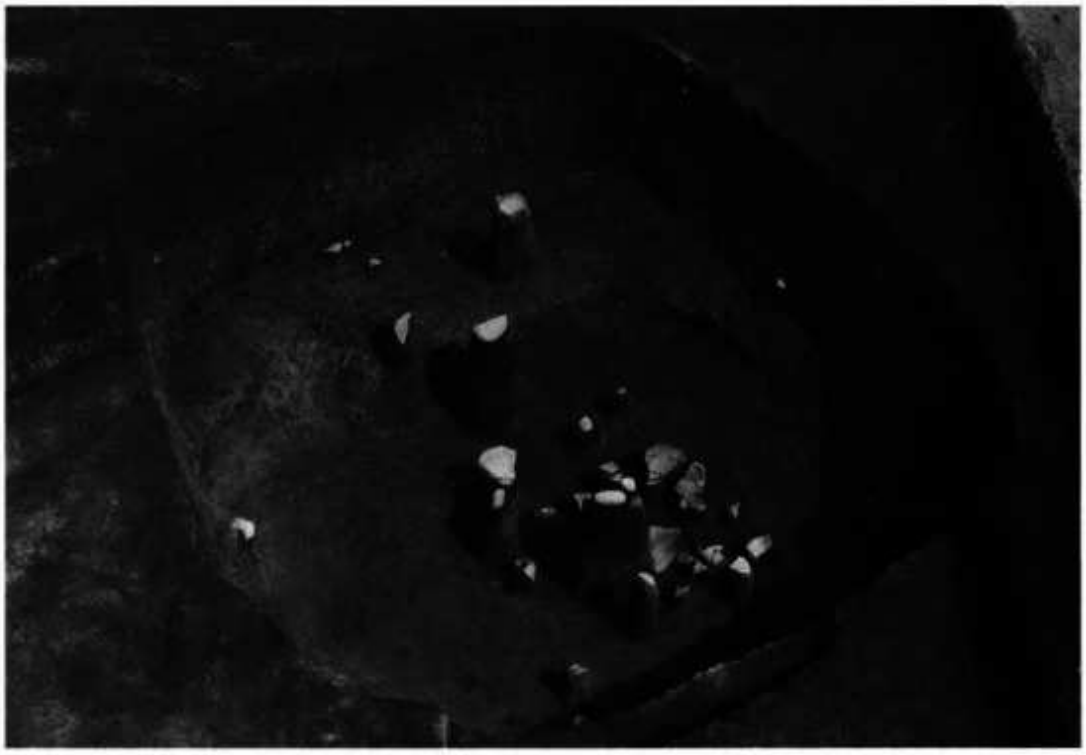
◀3号住居　竈断面（南から）



1号住居　出土遺物(1)

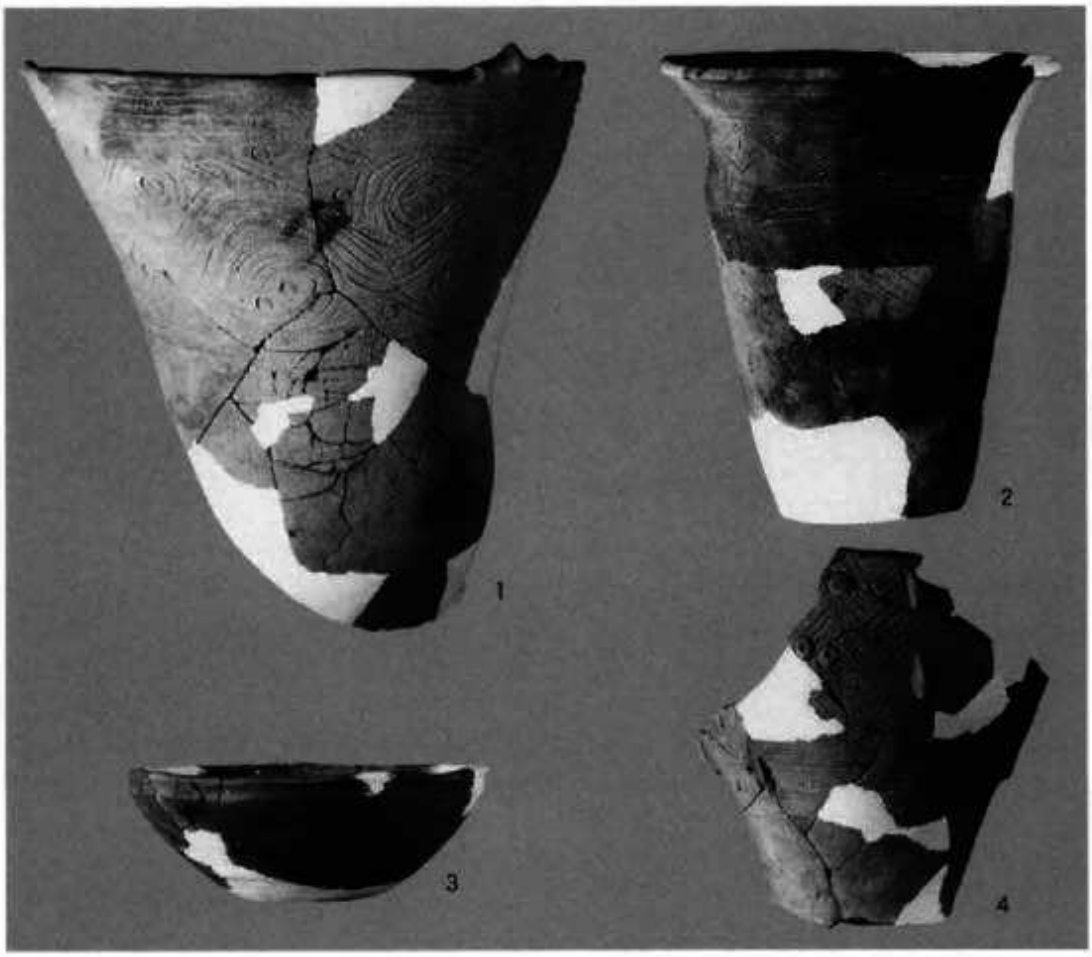


1号住居出土遺物(2)および2号住居出土遺物

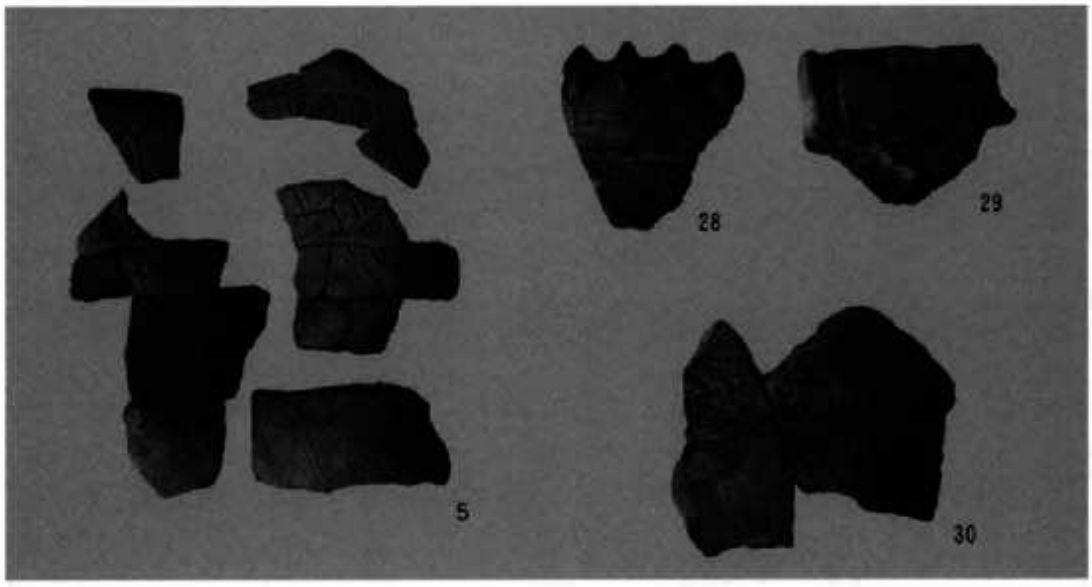


4号住居　全景（南から）

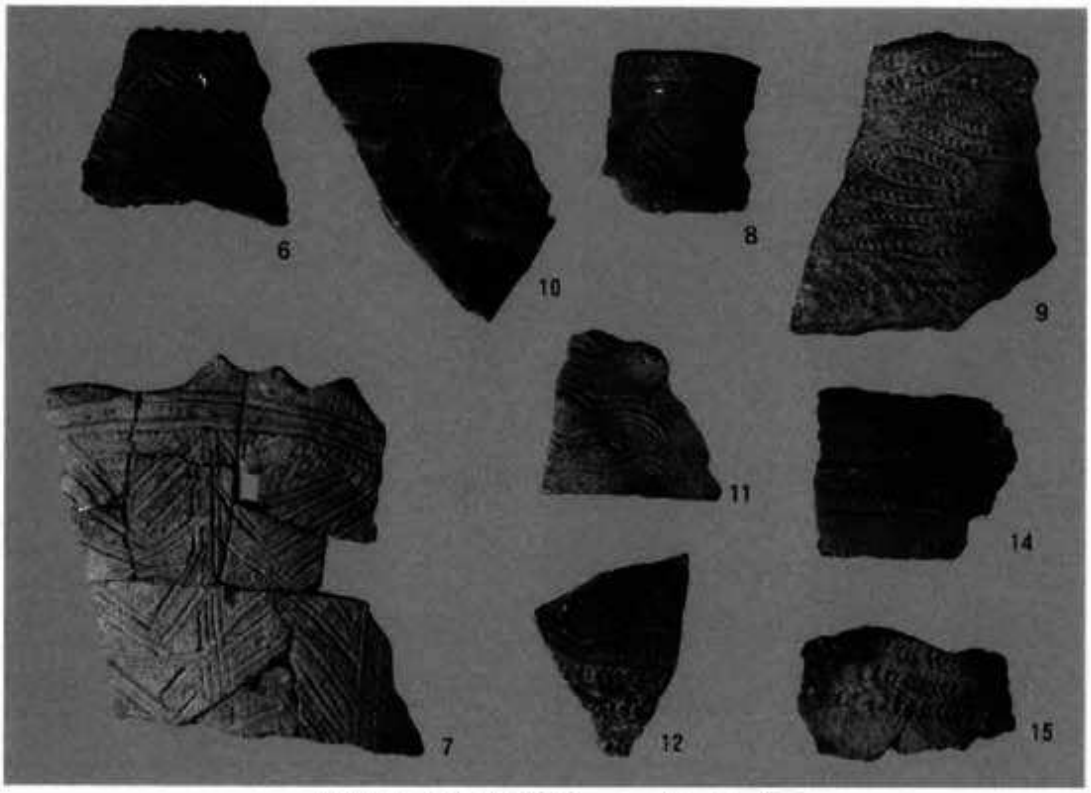
4号住居　遺物出土状態（東から）



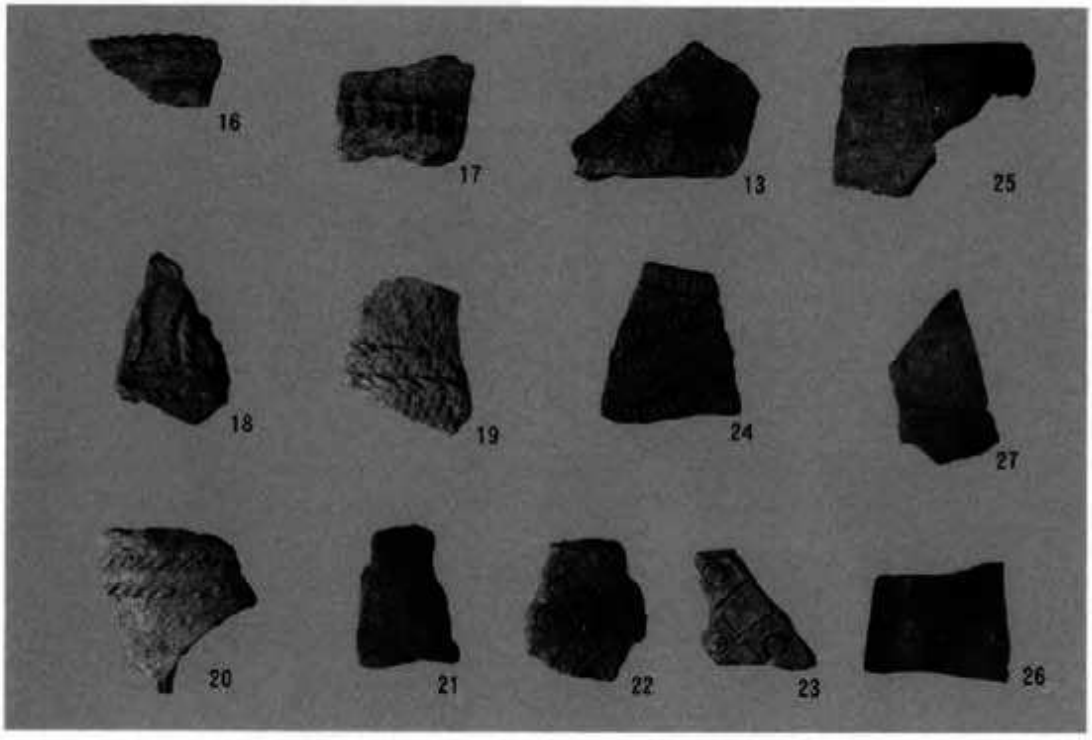
4号住居　出土遺物(1)　1～4



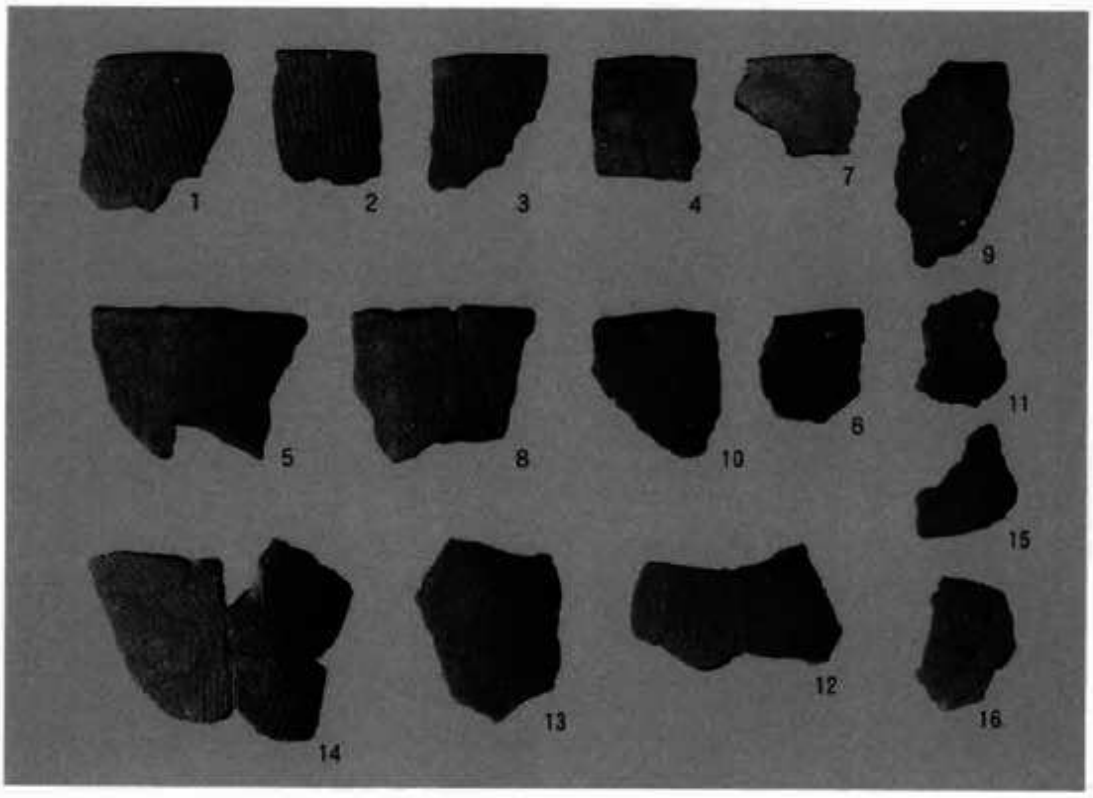
4号住居　出土遺物(2)　5・28～30



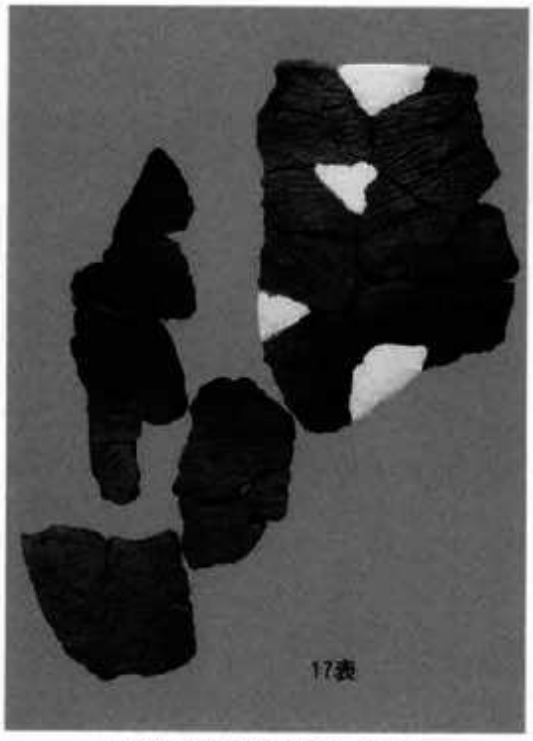
4号住居　出土遺物(3)　6～12・14・15



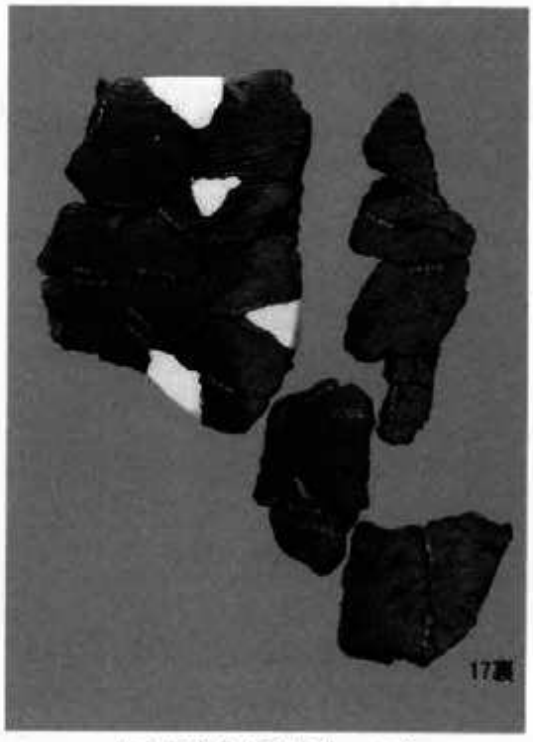
4号住居　出土遺物(4)　13・16～27



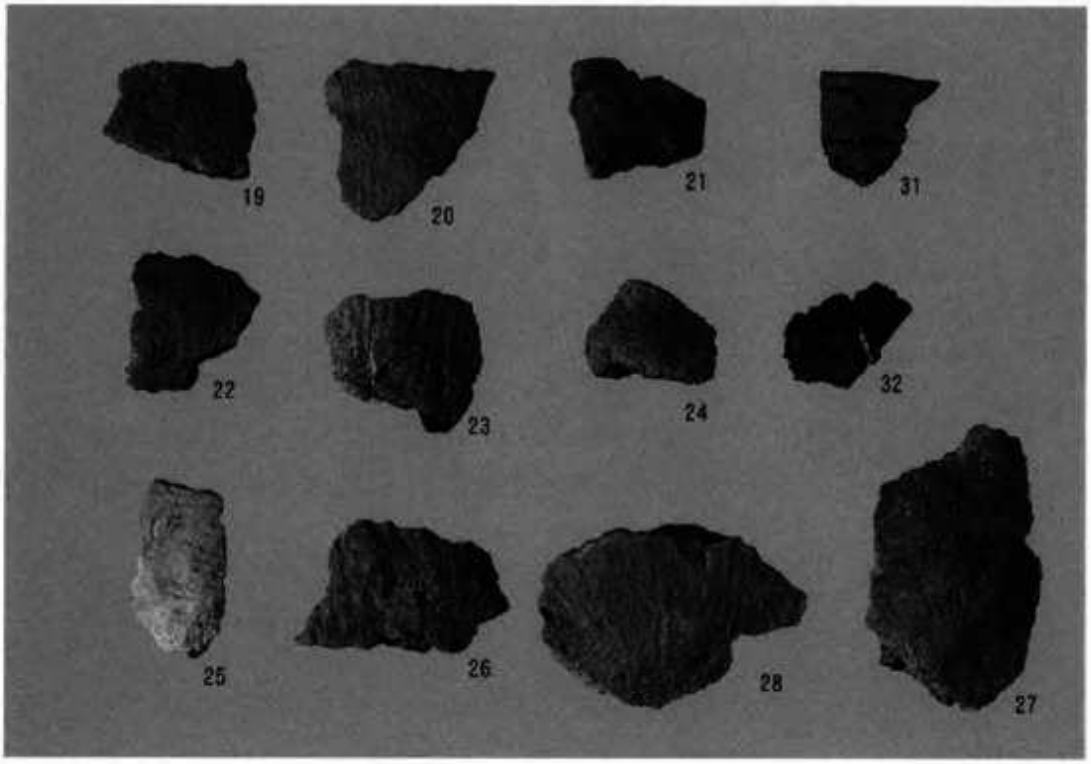
包含層出土遺物(1)　1～16



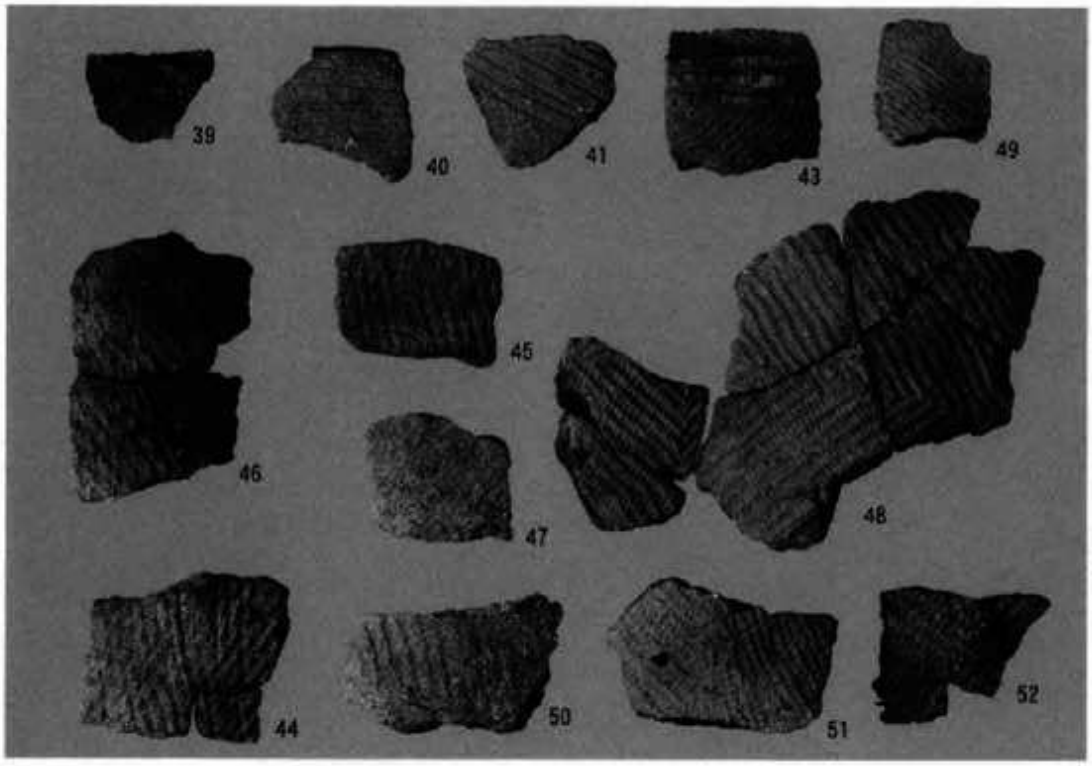
包含層出土遺物(2)　17表



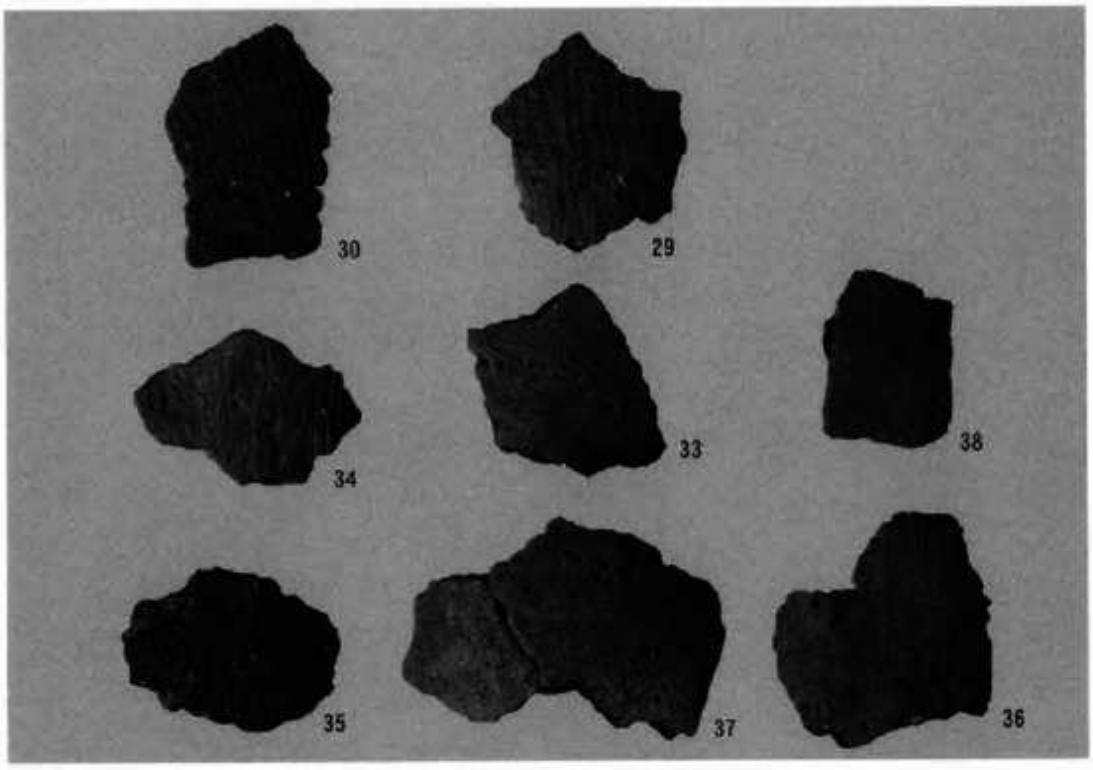
包含層出土遺物(3)　17裏



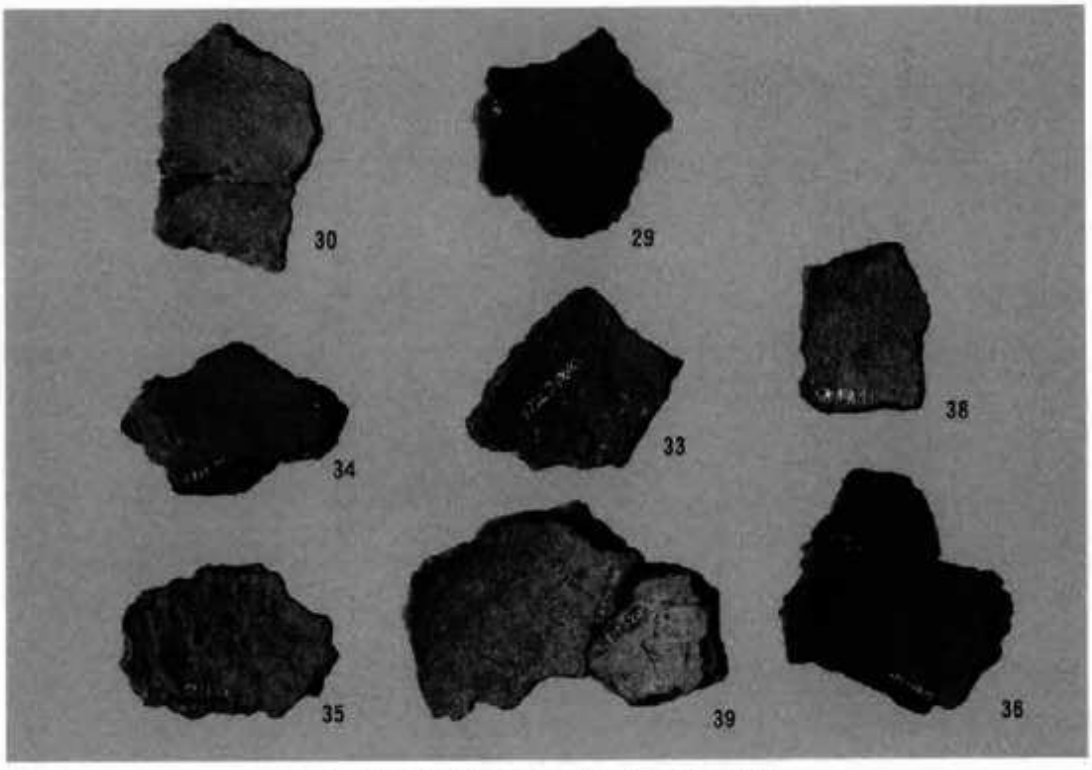
包含層出土遺物(4)　19～28・31・32



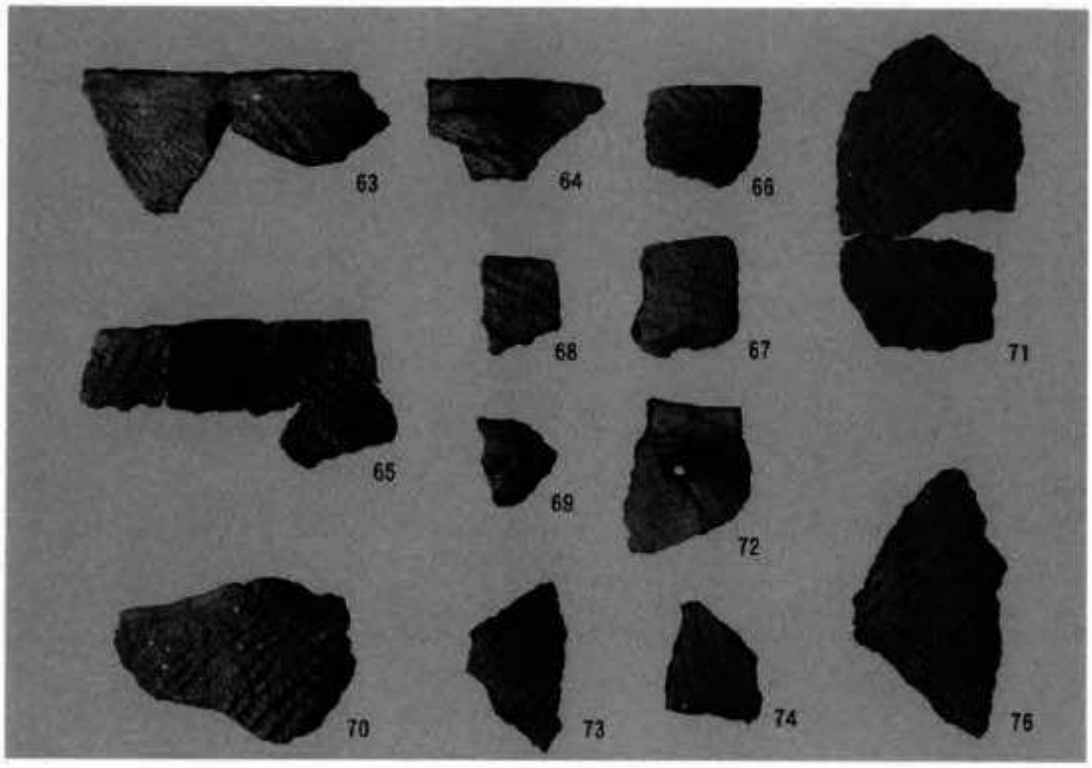
包含層出土遺物(5)　39～52



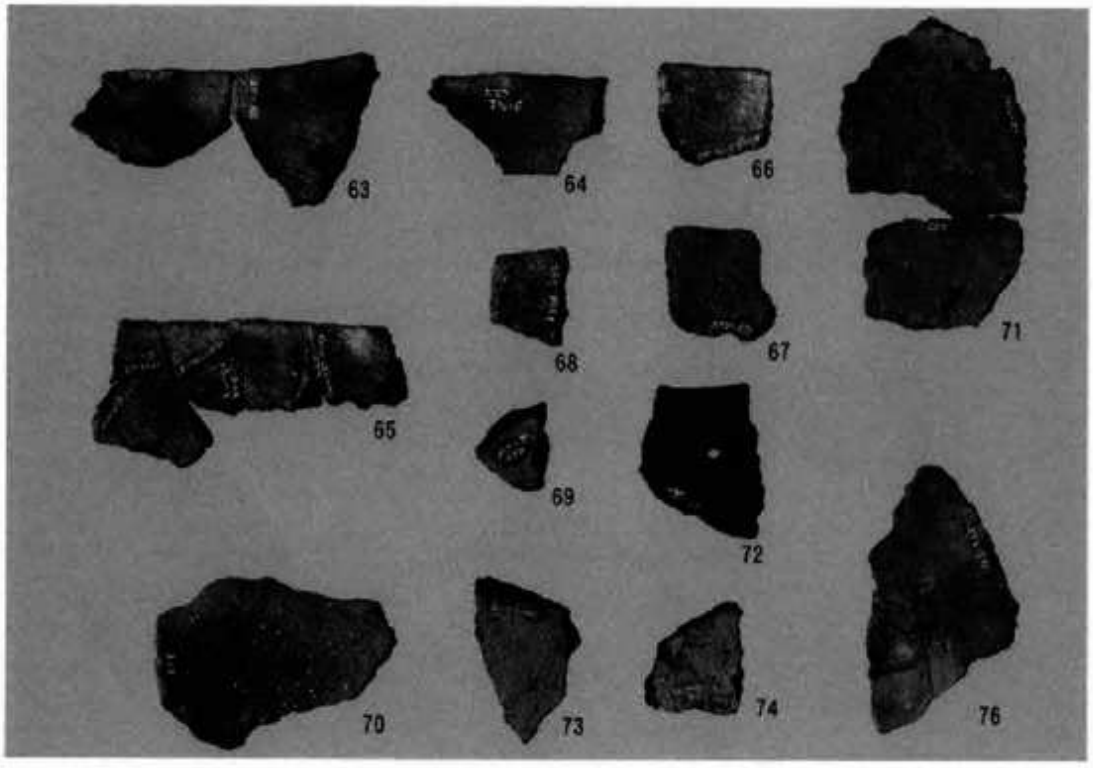
包含層出土遺物(6)　29・30・33～38表



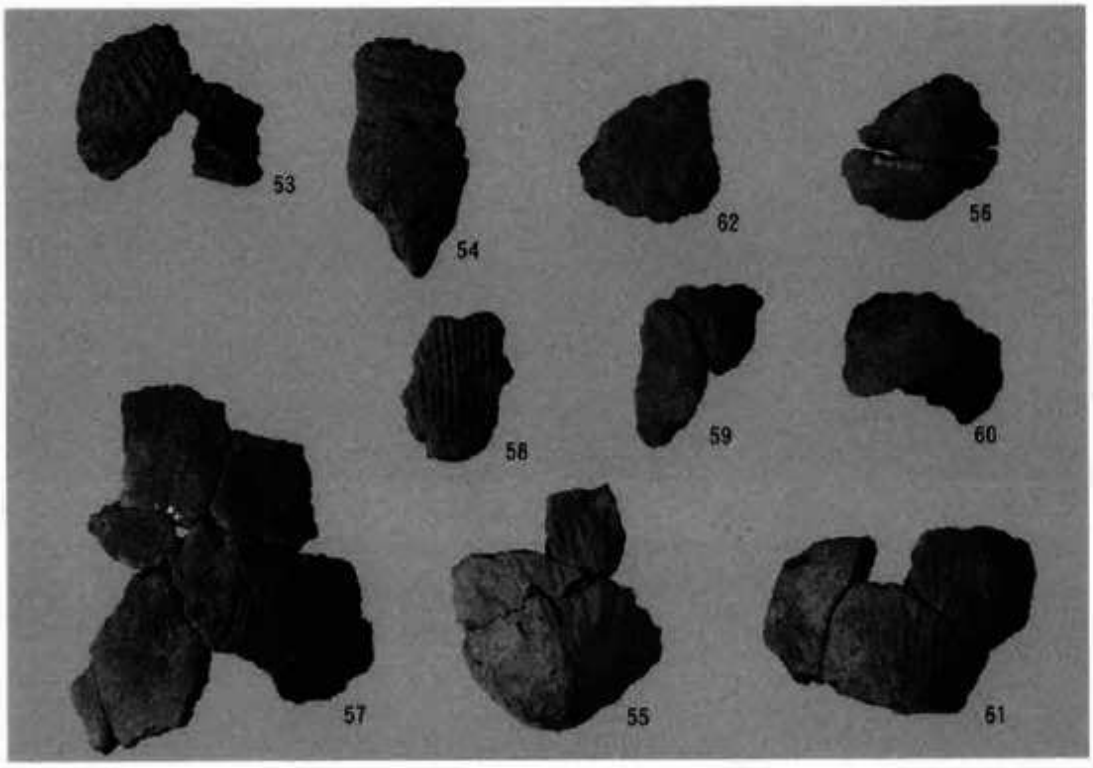
包含層出土遺物(7)　29・30・33～38裏



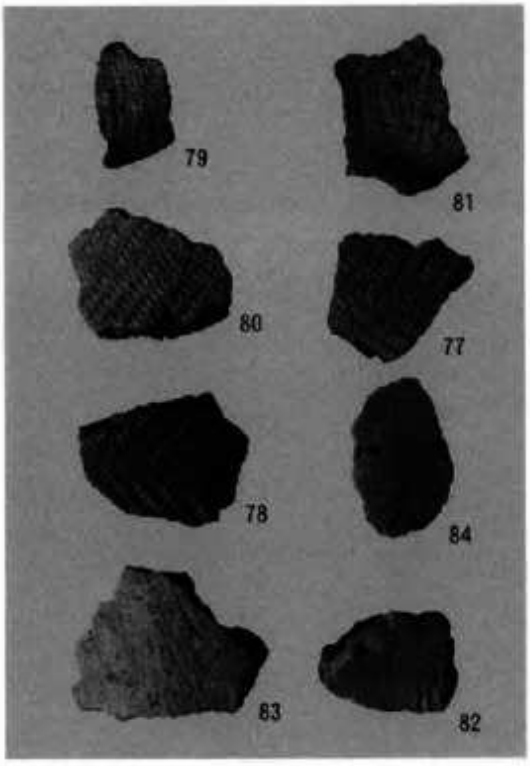
包含層出土遺物(8)　63～76表



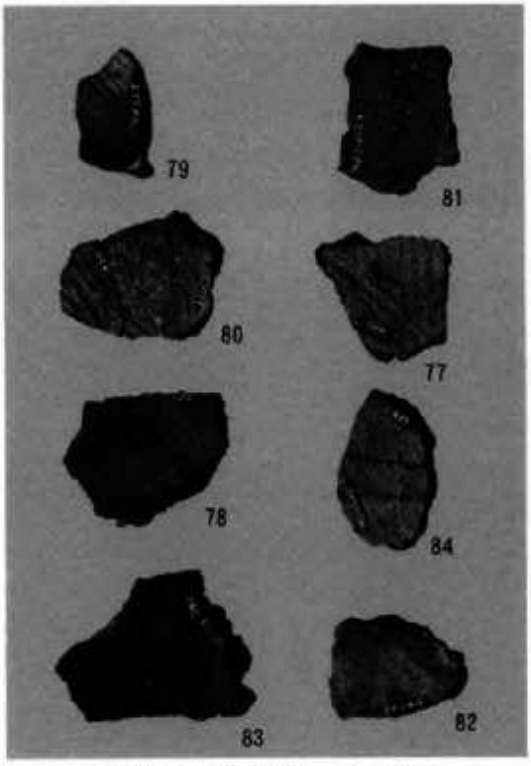
包含層出土遺物(9)　63～76裏



包含層出土遺物(10)　53～61



包含層出土遺物(11)　77～82表



包含層出土遺物(12)　77～82裏

1号住居　土層断面

2号住居　土層断面

3・4号住居　土層断面

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第17集

荒砥上諏訪遺跡II

県道今井前橋線特殊改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和57年3月20日　印刷
昭和57年3月25日　発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784－2

印刷／朝日印刷工業株式会社